

小 說
曉



始



特103
120



此の作の上梓を待ち侘びて、

先き立ち逝きし愛弟の許へ、

序

文は在らざるところ無し。風の水上に行くや、漪となり濶となり波濤となる。文こゝに在る也。火の物に傳はるや、炎々たり爆々たり烈々騰々たり。文こゝに在る也。草木の春に遇ふや、屯として芽を萌し、爛として華を敷く。其の秋に於けるや、敗翠霜に泣き、焦黄空に舞ふ。文またこゝに在る也。土石情無し、然も平にして原となり野となり、起つて陵となり丘となり、峙て巖々たり危くして嶙々たり。文またこゝに在る也。天穹物無し、然も雲布霞流、露を墜し霜を飛ばし、膏雨を下し、瑞雪を隕す。文またこゝに在る也。况んや人間の觀笑悲苦より憐愛憤怒に至り、生の晨

より死の夕に至るに於けるをや。文未だかつてこゝに在らざるの處あらざる也。文や實に天に瀾り地に漫る。無字の文章、古より今に迫り、今より盡未來際に迫りて、讀んで而して終に了る能はず、味はひて而して長く盡す可からざるものある也。乃ち知る文たゞ人の撰んで而して取り出し來り擧示し來るに任すを。知らず黒瀬君の那邊の處を取出し來り擧示し來るを。吾之を看ん、吾之を看ん。

大正二年暮春

露伴學人識

序

獨逸のオイケン教授は『藝術は必ずしも道德の雇人たるを要せざるも、兩者は何等相容れざるものなく、最高平面に在りては兩者結合して相離るゝ能はざるものなり』と云つた、今の文學者を以て自から任じて居る人々は、此言を聞いて恐らく冷笑するであらう、『道德が何んだ、そんな事は古い奴の言ふことだ』と、一概に貶すのであるが、儲其新しい人々の小説が何れ程世の中から歓迎せられて居るか、何れ程の價があるか、新しい小説は古い古い講談丈の讀者は持たぬのである、夫れは世の中に話せない人が多いからで、所謂 愚象には歓迎せられなくとも善いと言ふかも知れぬ、しかし讀者は悉く愚象ではない、歓迎せられぬのは何か其所に原因がありはせぬか、新しい作家の小説は觀察が極めて細微である、

文が頗る巧妙である、之れ丈は争はれぬ事實であるが、夫れが小説の全體であるのであらうか、キプリングは曾て曰ふた、『余は小説の何たるやを解せざるも、讀者の感興を惹起するを以て小説の重なる目的なりと信ずるものなり』と、讀んで何の感じも起らないものは確に小説とは言はれないのである、否小説であるにしても、世には歓迎せられぬものである、誰にも興味を與へない狭い社會の一方面の事を、極めて淺薄な思想でもつて如何に巧みに書き現はしても、夫れは歓迎せられるべき理由がないのである、今日まで歐米で多數の讀者を得た小説には、我[○]新しい作家の小説より於[○]以上の或る物がありはせぬか、ベザントの小説は倫敦の[○]人民宮を造り、シンクレアの小説は屠肉場の革命を起させた、此等は固より目的があつて著はしたのであつて、小説としての價値は零であるかも知れぬ、然しながら今の小説は餘りに目的がなさ過ぎる、少し高尚な思想を持つた人が讀めば

其作家に何等の敬意を拂ふとも出來ぬ、時代とは餘りに沒交渉である、社會とは全く隔絶して居る、何處の國の名高い文學者の説を見ても、此様なものが小説であると云ふ解釋はないのである、ボカッチオとダンヌンチオやフォガツツアローとは大に違つて居るのであるが、共に文豪であるのは何故であるか、ズーデルマンやハウプトマンはゲーテやシルレルと共に名高いのは何故であるか、自我と利己とを同じものと心得て居る人には解らないかも知れないが、少し眞面目に考へたならば直ちに了解が出來ると思ふ、若し今の新しい歐米の文學者が考へて居やうに我文學者も考へたならば、讀者に價値ある新しい小説が現はるゝと思ふ、否今現に世の中から此様な小説を要求して居る傾向が確にある、

曾て『相愛記』を著した黒瀬二水君が、更に『曉』の著作に従事したときに余は此様な事を君に語つたのである、君は、『曉』の稿を改むる事三回、其間屢ば災

厄に遭はれたのである、苦心の作と云へば此作の如きは實に夫れである、此作は余の思ふて居る事が必ずしも實現せられては居らぬ、けれど他の小説に比べて確に今の一部の人の要求を満たして居ると思ふ、君の如き深き信仰と熱心とを持つて居る人は必ず讀者に何等かの反響を興へずに止まぬと信ずる、余の君に語つたを茲に序の代りとするのである。

四月十八日

斯波 貞吉 識

序

畫師が小説の序文をかくといふことは、讀者は不思議に思はれるであらう。筆を執る自分でも、黒瀬君の依頼を、始は口繪の間違ひではないかと思つたのである。併し著者の云はれるには、どんな文壇の大家の名文でも、自分の著作に何の交渉も無いものを序文とするよりは、「曉」一篇に就いて大分御世話になつた貴君の一言を巻頭に乞ふことは、最意義の存ることであり、且切望するところである、是非かいてくれるやうにと、頼に望まれるのであつた。

成程、此の小説の主人公が畫工であるところから、著者は専門的のことに就いて、常に自分の意見を求められたのである。自分は願ひて御世話といふ程の何等の効果をも、著者に興へたとは思つて居らぬが、著者が二十枚でも三十枚でも、原稿

の出来る毎に、嵐の日、雨の夜、濱町河岸の橋居を訪はれて、文學上には全く素人の自分の助言？にも耳を貸されたのは、明治四十三年の若葉の頃であつた。一時世間を騒がした、ハレノ彗星の光芒も消へた六月の末、著者は危然たる大冊を抱へて、「漸く出来ました」と、疲勞の中にも希望に輝く眼を持つて訪はれた時には、自分も共に重荷を卸したやうな氣持がした。けれども、著者が種々の犠牲を拂ひ、心血を濺ひだ苦心の作も、ある事情の下に、酬はるべき何物もなく、世に現はるゝ機を失つたのである。それでも著者の失望は、他で期したより軽く見え

た。

此の著者は嘗て長篇の處女作を自費で出版された時、印刷所が火を失して、出来上つた原稿の全部を、焼かれてしまつたことがあつた。其の時にも著者は空しさ絶望の淵には沈まなかつた、徹宵、また徹宵、奮つて稿を新にし、強ひて出版の

豫定を遂行されたのである。

百難に當つて益々奮ひ起つ著者の勇氣は、神經衰弱者の多い現時の文壇に、全く比類掛きものといはねばならぬ。

去年、著者は其の骨肉の弟を喪ひ、涙痕未だ渴かざる今年の二月、神田の大火に一物を取り出す間もなく、家財のすべてを失ひ、精神上に、物質上に容易に起つことの出来ぬ大打撃を受けたのである。

運命は測られぬものである。先には沈落の不運に遇つて、空しく筐底に藏されて居た「曉」が火災前二日、著者の手を放れて、偶々友人の手許へ行つて居た爲、幸にも灰燼となるの厄を免れたのである。

著者が例の勇氣は、異常の悲しみと、思ひよらぬ悦びとに奮ひ起つた。

近江商人の名にし負み、進取的な勇敢な血は、江州人たる著者の身にも流れて居

る。著者は焼跡の俗務多端の中に、又々原稿の改訂に熱中し始めた。斯くして、此の書は長へに常闇となるべき運命を免れたのである。

大正二年四月

鏑木清方識

自序

此の小著の巻頭に幸田露伴先生に序を仰いだのは、私が文藝研究の初期から其の著書に、其の後響咳に接してからは其の坐談に、思想上の啓發を受けたる事多ければ、感謝の念より其の光榮に浴したのであります、厚く御禮を申し上げます。

私は茲に特筆大書して、斯波貞吉氏鏑木清方氏に向つて、謝恩の辭を致さねば之れを公にするに忍びぬ事があります。抑も此の「曉」を起稿したのは明治四十三年の二月で、實は大阪朝日新聞の懸賞募集に思付いたのであつた。私は其の執筆中幾度となく鏑木氏を訪ふて、其の教へを乞ふた。而して愈々出する時も同氏の家庭を騒がして、其處から發送したので、落撰と解つた時の同氏の表情は、私の何時迄も忘れ能はぬ知遇の現れであつた。今度漸く出版するに就いて、當時御不例

の中より表紙の意匠を仰ぎ、序文を頂くなど、敢て是れに限らぬが、私は如何に謝すべきかを知らざる程御厚意を辱ふしたのであります。新聞小説として書いた丈けに、此の作は一度何處かの紙上へ掲載を得たかつた。けれど思合しからず、私は全部添削して、直に斯波貞吉氏へ投じた。同氏は未だ至らぬ處がある。それに新聞には不向きだと論して返された。事實不向きであつた。私は中村氏、頼母木桂吉氏、鳥崎藤村氏、安孫子貞治郎氏、石山福治氏等の好意に依つて、方々へ見せて貰つたが、結局新聞社の方は断念するの外なかつた。又もや全部書き直して、又もや直に斯波氏を訪ふた。同氏は御多忙にも拘らず、斯る原稿を再應通讀して、一言一句の拙き點に至るまで懇切に指摘され、私に先づ修養すべく勧められた。其の後私は事ある度毎に同氏を訪ふて、種々様々の有力な援助を仰いだ。今回序文を辱ふした位は只の一事で、私は其の知己の恩に感銘し居る次第であります。

ます。此の上ながら私は謹んで、鏑木清方氏、斯波貞吉氏の御厚志に深謝し奉る。實はもつと早く出版する積りであつたが、一昨年邊りから私は家事に遂はれて、文藝を顧みる暇が少くなつた。私のやうな者は色んな仕事をして、餘裕を作つてから悠々と著作に従事したいと思つてゐた。回顧すれば處女作は亡父に献じ、第二の此作は亡弟に、此の間には随分出來事が多かつた。容易に効果の見えぬに危ぶむ母や、同じ原稿に三度迄も假名付けさゝれた妹も、私共三人切りの家族は夫此の作に辛勞を領つた。それに私は火事と縁が深い。私の文藝と火災とは切つても切れぬ悪縁で、十六の歳の二月、郷里で自分の過失から全焼したのが貧弱な私に藝術上の素質を幾分與へた遠因であつた。處女作の「相愛記」は四十二年二月印刷所の國光社で焼けて了つた。其れを辛々書直して公にしたので、最早是限り火事とは縁を切りたいが、思へば面白い運命である。此の「曉」の出版を促した

動機も亦去る二月廿日、神田の大火で類焼したからであります。

彼の大火の数日前、北神保町に出火があつた。其の翌日西村勇吉君といふ青年が近火見舞ひに来てくれた。時々運座など試みる誹諧に巧みな人で、其の日同氏はマーデンの著書に刺激されて、ひどく亢奮してゐた。それで私は三度稿を改めた「曉」の草稿を見せて、共に努力すべき未來の多きを快談した。同氏が持つて歸られたのを知つたのは、類焼見舞ひを受けた時が始めてであつた。私は當夜延焼しない見込みから、習作は愚か藏書から商品から悉く灰にしてつた。其の際疾い場合に西村君に拾はれた此の「曉」は、聊か世に出す價值があるものゝ如く思はれた。私は早速多少取捨を施して、刊行の準備に取懸つた。末尾の脚本「毒藥」も曾て植竹喜四郎氏に預けて置いた一昨年 of 舊作で、「曉」と同じ意味から加へました。深く兩氏へ感謝致します。尙石山福治氏の御盡力に負ふ處甚だ多く、

乍末筆御厚禱申上げます。

以上は此の拙著の今日に至れる略歴であるが、斯る埒もなき自序に一讀を賜つた讀者諸君！ 私は斯くも勞せざれば、此の愚作ですら諸君に見ね得なかつた事を衷心より愧るものであります。有體に云は、今少し描き様もあり、描きたい事もないではない。併し舊作の土臺を崩す譯にも行かず、不十分とは萬々承知しながら臆面もなく出しました。願くは御同情の裡に、御精讀を垂れ賜はらん事を。

大正二年四月廿一日

著者謹識

小説
曉

一の二

黒瀬 二水 著

數年前の事である。

田口塾が愈々畫學校に成つて、一月の中旬盛なる開校式が擧げられた。一代の巨擘、格堂先生が多年の抱負を茲に實現されたので、日本畫科、西洋畫科、圖按科の三科を設け、ペンキ塗の新校舎で教鞭を執らるのである。世評はさのみでないが、先生の名聲を慕ふて、日本畫科へ加はる新入生は尠なくなつた。夜學部へは頭の禿げた老書生が見えるし、女子部へは華やかな女學生が現はれた。教

師は大抵校主の高弟連で、喜久次の入つた洋畫科は長谷川と云ふ鋒々たる新歸朝者であつた。

始業式の日、喜久次は昨今では唯一人の丸尾といふ同級生と共に受持教師から、一體洋畫の長を學んで日本美術を大成しやうとする試みは、恐らく天才に非らずんば不可能であらう。素より必要には相違ないが、先づ一方の奥儀に達してから成すべきである。淺薄な不調和極る和洋折衷ほど醜いものはなく、新しいばかりが藝術の能ではない、つまり之れは出口先生獨特の計畫なので、自分は君等を隠れたる天才と信じて教へたいなどと、煽てるやうな貶すやうな氣焰交りの訓話を聞いた。

喜久次はドシ／＼砂利を踏んで學校の門を出た。軽い色の散雲の浮いた、風の荒吹く、何だか咳の出さうな天氣である。丸尾が後から。

『ねえ君、全く吹き飛ばされちやつたねえ。』となれ／＼しく云ふ。
喜久次は富豪の坊ちゃんだと吹遠して、

『さうでもないでせう。』

『だって君、僕等を捉まへて天才とは笑かすぢやないか。長谷川さんも申談ぢやない。』と云ひつゝ立停つて、隣寸を幾本も擽つて巻煙草に火を付けやうとする。

此の時女子部から出た二人の婦人が、チラと瞳を投げて通り過ぎた。其の内の一人は此の間から一寸喜久次の眼に止まつてある十八九、今日は銀杏返しに結んでゐる。他は二つ三つ年下のお下げ髪で、大きなリボンは紅かつた。喜久次は行過ぎずに見ぬ振りで銀杏返しの内容を視ながら、丸尾の話に調子を合せて暫く歩んだが、婦人等の曲る方向は彼のと違つた。丸尾は其方へ別れて、彼等と睦まじげに交はつて行く。喜久次は弱い夕日を受けて、裏猿樂町の自宅へ歸つた。

喜久次は一昨年高等工業の圖按科を出た男で、目下久松町の白子屋といふ形紙屋に勤めてゐる。在學中彼は刈屋教師に知られて、純正美術で立ちたい志望を高め、田口熟へ紹介して貰つた。刈屋は今では畫學校の圖按科の教職をも兼ねてゐる。堂門下の高足で、爾來彼は兩先生より指導を受けて來た。寧ろ實際的な壯者だが、一應は物事を仕遂げる熱情があるので、格堂先生は多少彼の爲めに計る處があつた。併し彼には其れが辛い事情があり、家庭の現状も亦許さぬので、僅かの餘暇を以て西洋畫科へ入つたのであつた。

彼の家は、江洲の郷里で相當な百姓であつた、父權七は地方の自治制に盡力したり、書畫骨董を弄つたりして、寔に平穩な生活を營んでゐたが、長子の日露役で戦死以來家運が傾き初めた。喜久次は行々、嫂の實家の方で働く筈であつたが、亡兄の妻との結婚問題で色んな波瀾を惹起し、到頭此の地に職を求めて、昨年父

母と妹のお藤を引張つて來たのである。

權七は道樂半分に書畫屋を始めたが、山の老樹を盆栽にしたやうな形で、一年經ずに閉店を餘儀なくされた。荒牧と云ふ詐僞師同様の仲間から光琳の屏風其の他で巨額の偽物を喰はされて、一家の資力と元氣をば甚大に殺がれたからである。寄る年波に權七は田舎で養ひ來つた自信を失つて、只管忤に頼るやうになり、赤毛布其の儘のお絹(喜久次等の母)は朝夕復へらぬ愚痴を呷す。お藤は麴町の某女學校へ通つてゐるが、凡ての責任は殆んど喜久次の庖腕に懸り、佗しい仕舞つた屋は骨肉の情愛が支へてゐる。

喜久次は血氣に逸る丈け内心に空虚を覺えて、當所なき戀に憬がれたり成功を夢見たりして、落着きのない月日を送つてゐるのであつた。

111

喜久次が老婆の萎びた半身のデッサンに掛つてゐると、長谷川教師がのっそりやつて来て、

『こりや先線が強過ぎる。』と荒々しく窓掛を卸した。

『どうも美味く行きませぬ。』

『さうかねえ、丸尾君は来ないな。』とチラ／＼光つた顔で覗込んで、

『斯う弱くツちやどうも困るねえ、昨日あれほど言つたに、君は筆づかひにはかり腐心してるよ。』

『どうもさう成りまして…………。』

『そら無理はない。是れが日本畫家の病ひだからねえ。僕等も散々ローランス先

生から叱られたもんさ、可い加減に小細工を止めるツて。』

『つまり自信が足らぬのです。』

『熟練しないからさ。當分は塑像でやつた方が可からう。——だがまあ、此れは仕上げたまへ。』と云つたきり、にべもなく行つて了つた。

喜久次は折角の感興を挫かれて、ストーブの側へ三脚を引寄せた。兩手で頭を抱へてゐると、モデル婆が、

『御都合で御飯を…………。』と書工の無能を嘲つたやうに云ふ。

其處へ格堂の書生が呼びに来た。喜久次はちと不安に驅られて、半町ほど隔つた先生の私宅へ行つた。何時になく中の間へ通されると、先生は瀬戸焼の火鉢を抱へて、新聞紙を讀んでゐた。毬栗頭の大兵肥満で、髯一つ碌に調べてなく、知らぬ人は請負師の親分とでも受取りさうな風采である。

『もつと此方へ寄れ。』と火鉢を心持ち突出して、先生はぢろく弟子の容子を見
る。

『有難うございます。嘸ぞ御多忙でゐらっしゃいます。』

『いゝや、どうも君は痩せてるな、さう痩せちや可かんねえ。』

『精力が足らぬからです。私は先生、自分の貧弱を痛切に嘆きます。』と動脈の充
血した手を火鉢に鬩した。

『長谷川にやられたな。君は危険な俗物だから、どうもものになるまいッて。』

『さうでせうか、餘り可愛想ですな。』

『でもさうぢやないか、あまり俗臭芬々だから、此の間のやうな大失策を演じる
んだ。苟くも其の道の者が側に居つて、あんな鹽物を背負込む法があるか、えい。
皆な利慾の迷ひだよ。一體君はどう云ふ了簡で、家族を引張つて來たンか。』

此の鋭い話半へ、上品な奥様が煎茶を自から持つて來て、室内の空氣を多少
和らげて行かれた。縁障子に當つてゐた弱い日影は、何時の間にか腰板の裡へ沈
んであつた。

先生は茶を啜りながら、

『お父さんはどうしてゐる？』

『遊んでは居れない性質ですから、矢張り下らない品物を擔ぎ廻つてるやうで
す。』

『あゝ云ふ老人を都會で苦しめちや、何しろ氣の毒だよ。而して京都の未亡人は
未だ再婚しないかい。』

『何だか愚圖々々してますが、……………。』

『そんなら親達は彼方へ行つたらどうか。』

『そんな事は出来ませんよ。』

『ちやア寧ろ郷里へ歸つたら可からう。然うでもしなくちや駄目だよ、ほんとに。未だ財産は残つてるさうぢやないか。』

『もう殆んどないのです。』と情けなさうに密と先生の動止を見た。

『何しろもつと荷物を減らして、専心研究しなくつちや可かん。』

『夫れは勿論さうしたいのですが、何分非常な反對を受けて來たもんですから、今更歸國も出来ませず、私は全く困つてます。』

『だから子が一身上の事は引受けてやらうと云つてるぢやないか。其れを君は何故無にするか？え、君！君は生白い顔や絹の衣服が眼につくんだらうが、そんなものは繪具で塗れ。藝術家に實感に禁物だ。而してもう可い加減に何とかしないと、半間な人間に成つちまふぞ。』と大きな苦い顔を背向けた。

縁障子を一寸開けて、退避いだ者がある。

『構はぬ、入れ。』と云はれて、先生の愛嬢 薫が熱つた顔であづ／＼入つた。

是れが喜久次には内々禁物なので、底髪で匿しきれない凸の眉毛は薄し、低い鼻には變な節があり、首筋から胴、腰の邊りまでが頗る亂調子である。年齢も彼より二つ三つ上らしく、只感心なのは、其の逝く春を掩ふやうな華美な服装をしてゐないことだ。さも喜久次が傍にゐるのを辛さうに、何事かを小聲で復命してゐた。

『あ、可矣、夫れでいゝから、御飯を持つてお出で。』

『はい。』と態をして立つ。

『先生、私にならどうぞ何です。』

『いや其の御心配には及ばぬさ。はアは……。』と意地悪く笑つた。

喜久次は間もなく學校へ来て、モデル婆に暇を遣つて、寒空の郊外を蒼い顔で散歩してゐた。

一の三

喜久次は前から何でも美人を娶りたいと望んでゐる。容貌は性情の表現だ、醜婦は大概愚劣だと思つてゐる。彼が畫工にならうとした動機の一つも實は其の邊の囁きからで、未來の家庭には若い熱情を籠めてゐる。それで心にもない結婚を他から強ひられるのを此の上もなく嫌つて、恪堂先生の方面も唯勝手に臆測して、神經過敏に警戒してゐたが、どうやら取越苦勞のみで濟まなさうになつて來た。此の調子だと、我意を通せば、勢ひ不遜な門弟となる。若し先生に睨まれたら、どんなに虐待されるかも知れぬと、恪堂の性格を思合はせて不安の念に襲はれた。

併し喜久次は畫學校への登校日を待ち兼ねた。新研究の興味の外に彼の銀杏返しに引かされる氣分が湧いてあるので、行會へぬと張合ひを抜かした。彼女はふくらやかな底髮の時もあるが、黒味勝ちの眼には絶えず溫情を湛え、熟した莓のやうな唇は動ともするとにっこりする。額の生際も鼻の曲線も描いたやう、豊饒な類には燕脂と胡粉を巧みに溶いたやうな健康美が現はれてゐる。そはに全體の姿勢が佳いので、カシミヤの袴を穿いて、巻いた繪絹がな携へ、細踵の靴か何かでシト／＼行く後姿などはどうしても彼の腦裡を去らない。是れぞ永らく憶がれてゐた理想の人だ、斯う云ふ美人と苦樂を共にし得たらと思はぬ譯にいかなくつた。

或る朝のこと、妹が昇降口にゐるのを搔除けるやうに、彼は繪具箱を擔げてあたまを出掛けた。お藤は、

『まあお待ちよ。私も其處まで……。』と紫の風呂敷包みを抱へて連立つ。

『どうだ、勉強してゐるかい。』

『え。今日は小石川へ廻るのねわ。』

『あ、土曜ぢやないか。』

『今朝がた面白い寢言を云つてよ。』

『ふん。』と喜久次は横向いた。

お藤は兄と八つ違ひの十七で、近頃大分京都風は抜けたが、ばつちりした目許や口元には無邪氣な愛嬌がある。二人が電車の往來の劇しい小川町の角へ出ると、彼女の學校傍輩の鈴江と云ふのが待つてゐて、

『お早やう。』と叩頭をした。

『どうもお待遠さま。』とお藤は譯もなくぼつとする。

鈴江は書畫屋時代からの昵近で、伶俐さうな細面の女である。喜久次は彼女に、『兄さんに宜しく。』と手輕に云つて、彼等に別れた。

彼は糸瓜の化物のやうなズボンや案山子のやうな古着のぶら下つた柳原を、電車に遂立てられながらてくく歩いて久松町へ行くのが例である。今日も午前中は中形浴衣の圖案に腦漿を絞つてゐたが、是れからは自分の天地だと大急ぎで畫學校へ來た。けれど教師は休むし、同級生は見えず、洋畫科は殆んど中絶の姿である。喜久次は自分の安ッばさに呆れて、ぼんやり實習室の窓に凭れた。

藍懸つた空は薄霞が棚引いて、遠近に梅の咲いカ淡い春である。吹く風は未だ寒い、鎖されてゐた常磐樹は萌出し、裸木の梢も眼み、こんもりした杉木立は四邊の人家を彩つてゐる。目先きの二階家の欄干に紅裏の蒲團を干して置く近く、雀が二三羽飛んでゐた。ぼつと日光が卒に曇つて、雲の影が出來て、又晴れ

た。向ふの學校の運動場には、テニスを数名がやつてゐる。喜久次は窓下の猫柳に視線を落して、徒然眺めてゐたが、其處へ丸尾とヴィナスとお下げとの三人が計らずも現はれて來た。

喜久次はどつきりして、壁に脊中を摩つて腰を卸した。左あらず降りて行つて、一緒に話さうかと腕組したが、どうも丸尾は別世界の人間のやうな氣がして、自分から同席を求めると権利がないやうに思へる。と云つて、嫉しさに密と覗けば、臆面もなく饒舌つてゐる。宛然秘藏の名書を玩具にさせてるやうな形で、見てゐる程情緒が亂れるばかり、彼は其の儘學校を飛出した。あゝ、世の中は金だ、物質的だが併し、丸尾如きに憧憬の的を自由にされて堪るものか。何か可い資縁がないか知ら、残念だ、心外だと、苦し紛れに元町の刈屋の宅を訪れた。

太ッちよの奥様——爾後は便宜上細君の名稱を用ひる——餘り血色の良くない

世帯盛りの夫人である。先年一子を喪ふて、永らくヒステリーに罹つてゐたが、今日は何時よりも愛想よく、

『ようこそ、さアどうぞお上り。』といそ／＼迎へた。

一 の 四

刈屋は不在、雪子（此處の長女）は遊びに行つたと見えて、四邊はひっそり、隣の屋敷に鶏が暢氣さうに啼いてゐた。細君は赤ちやんを抱きながら茶菓を持つて來て、

『さア召上れ。』と款待す。

『難有う、大きくお成りなすつたねね。』

『はア、お蔭様で。』とあやしつゝ細君は、梅見に行つたかとか、もう直き櫻が咲

くとか、畫學校はどうかとか、卒業生が就職難を嘆じてるとか、流行界は矢張り光琳式の全盛かとか、何か面白い事がないかとか、平凡な話題を連發する。かと思ふと、近頃刈屋が教會を遠ざかつて、宗教を輕蔑して困る。趣味の合はぬ人と結婚した程詰らぬものはないなどと、年柄にもない不平まで洩らした。八百屋が來たので、立つて行つた。

喜久次はこんなに喋る人かと今更に驚いて、其處に親しさを覺えた。彼は此の客間兼主人の書齋へは數年來屢々來たもので、入學した年、先生の病氣を見舞ひに來たのが抑も初りであつた、其の後色んな談話に餘り長居をして、ヒステリーの細君に追立てられた事もあるが、兄貴が戰死したとて狼狽へて一番に馳込んだのも此處だつた。床の間の杏雨の山水や恪堂先生の半身像や、椿と梅を挿して置く花瓶までが永の馴染で、本箱の中にある書籍の如何をも略ぼ知つてゐる。卒業後

郷里で埋没されかけた失意時代に、白子屋へ斡旋してくれたのも此處の先生で、荒牧に忌々しい偽物を脊負はされた場合にも何くれ盡力して貰つた、其の他實際の狭い彼に取つては、實に隔てのない先輩であり、親友と信する第一人である。『どうも女中が思はしくないんで、ほんとに困るんですよ。』と云ひつゝ、細君はもとの坐に着いた。

『お大抵ぢやありませんねえ、お一人では。』

『え、え。ですが、貴方も可い加減にお娶ひなさらぬと好けませんねえ。』

『何だか詰らぬッて話しぢやありませんか。』

『ですから、十分御撰擇なすつて、佳い方をお娶ひなさいましな。餘り迷つて被居ると、何方も着かすになりますから。』

『來てくれ人があつたら、悪くもありませんがねえ、まだ早いでせう。』

でも、貴方はもうお家を有つてゐらっしゃるのだし、方針も定まつておあんなさるのだから、そら幾らもありますとも。貴方の理想に近い方と婚約なすつて、純潔にお樂のしみなすつたら好いわ、私達の教會ではねえ、二年とか三年とか未來を誓つて、婚約なさる方が随分あるのよ。ほんとに解し合つて、夫れから結婚するのが健全な方法ですわねえ。

『そらさうでせうが、途中で厭いたらどうします？』

『男子の方はねえ、どうも……。』

『女の方はねわと言ひたくなるが、マア議論は止ませう、何しろ私のやうな貧乏人ぢや駄目でせう。』

『マア。』と細君は相手の顔を蔑すむやうに見て、

『貴方はそんなに婦人を解して被居るの？、夫れでは中々困難ですよ。』……どうも

さうだらうと思つてました。』

『でも貧乏が可い譯はないでせう、ごうしたツて。』

『いゝえねえ、富の問題ぢやありませんわ、貴方は非常に我執が強いんだもの。時々良人ともさうお噂してゐるんですよ。』

『驚きましたねえ、それぢやあれですか、先生の姉さんなんか其の約婚のお仲間ですか。』と喜久次は胸の動悸を抑へて、何氣なく云つた。

『いゝえ、彼の方にそんな事があるもんですか。病身な娘は上げられないツて、何處へもお出しなさらぬのよ。終生獨身でお通しなさるのですツて、あゝ云ふ御病氣だから、お氣の毒ですわねえ。それに申込む方だつて、先生の名聲から來るのが多いんでせう。でなくとも、さう誤解され易いんですよ。長谷川さんなんか是非にと騒がれたんですけれど、先生のお嬢様を頂く譯には行かないツて、到

頭島さんのお義妹を……。」と云ひよして、眼を醒した赤ちやんの林檎色の頬に接吻をした。

一の五

喜久次が刈屋の門前へ来ると、近隣の子供等と遊んでゐた雪子が、

『小池さん。』と駆寄つて、

『お父さんはお不在よ。』と人懐ツこく甘へる。

『お母さんは……?』

『おらしてよ。そしてねえ、橋本先生とねえ、お話なの。私達のねえ、日曜学校の先生よ。——あの羽子取つて頂戴な、よう。』

『そんな物がどこに……?』

『お正月の時失つたんだもの、彼處にあるわ。よう、ほんとうだから。』と古びた門庇を指さして、飛び上らうとする。

喜久次は餘儀なく彼女を抱上げて、庇へ手を届かした。一尺ほど高きに過ぎた、他の子供等も無邪氣に彼に纏はる。其の内に橋本と云ふ先客が、細君と共に出て来た。彼は知合ひの大學生（鈴江の兄）であつたので、時宜の挨拶を交した。

『どうも失禮を……。』と細君は喜久次に云ふ。

彼はちと顔を熱らして、

『どちらかお出掛けですか。』

『はア、一寸教會まで……。貴方、今日晝學校は……?』

『休みました。』

『何か御用でしたか。』

『少々どうも……昨日は失敬しました。』と苦しうに云ふ。

橋本が此處で別かれたので、喜久次は細君と教會まで連立つた。昨日彼は格堂先生の娘が縁付かぬ様子を聞いて、會心の餘り早速口では言ひ悪い一書を刈屋に宛てた。何分暗流のある方面だから、不如露骨に打明けて、先んじた方が安全だと思つて、自分は薫さんに些か心苦しかつたが、病氣の爲め獨身で通される由にて自惚れた根性に愧入つた、實は自分は女子部の花である云々の某嬢に以前から私かに懸想して、是非共婚約がしたいと切望してゐる。何とか周旋して頂く譯には行くまいかと、寧ろ無邪氣な文句であつた。

處が細君は未だ其れを知らなかつたので、喜久次はよほど躊躇したが、辛々の思ひで切出した。細君はすぐ八の字を寄せて、

『そりや可けませんよ、幾ら美しい方だつて。貴方は島さん御存知でせう。先生に非常な崇拜家で、畫學校の建築にだつて、大層な寄付なすつた方。あの方のねえ、異母妹でねえ、それは……。』と相手の顔を覗さんむ。

事新しく聞かぬまでも、嶋夫人の名はかね／＼喜久次に尊く響いてあつた。妙だ／＼と頷きつゝ、

『どうしたんです？』

『そのねえ、あの御容貌でせう。だもんだから、方々で男子に騒がれて、色んな噂があるの！』

『さうかも知れん。』

『え、え、だからねえ、今の間にお止しなさいまし、悪いことは言ひませんから。』

『仕方がないですな。』

『それぢやねえ、宅と相談して御覽なさいな、今晚でも来らして。』

こんな會話の間に、彼等は三崎町の教會の前に来た。二時から婦人會とかいあるさうで、細君は後刻を約して會堂へ入つた。他所の婦人達もちらほら入つて行く。堂の奥ではオルガンが鳴つてあつた。

喜久次は遣る瀬ない想ひに満たされて、塵埃だらけの街道を無意味に歩いた。異母妹だらうが、孤子だらうが、其れは構はぬけれど、色んな噂とは初陣早々かの痛手である。こんな安排では、逆も自分の手は届かぬか知ら。先刻雪子が羽子なんかを取らしたが、情けない辻占だつたなどと神経を苛立て、道の一二里も市中を彷徨つた、夕方母が案じるやうな顔色で歸宅したが、食事を済すとすぐまた出鱈目の口實を設けて、そはく刈屋の宅へ出掛けた。

洋服の儘刈屋は出て来て、鼻筋に皺を寄せつゝ胡坐をかいた。四十肥りの丸顔で、度の強い近眼鏡を懸けてゐる。其れを初中終拭く處から、曾て學校では眼鏡屋と渾名してゐた。頭为天邊は薄すり禿てあるが、鼻下髯は中々美しい。ポケットから昨夜の文殻を出して、

『こりや預つて置けない。飛んでもないこと考へてるな。』と突き返した。併し其の聲には幾乎同情の響きがある。

『全く恐縮です。』と喜久次は吊洋燈の影に匿れて、荐りに頭を掻く。

『そら敢て無理とは云はぬがねえ、先生の姉さんがどうだとか、些と言葉を慎みたまへ。僕は家内にも言はんでるんだよ。』

『はア、どうも……。つい正直に……。』

『正直も事に依りけりさ。何しろ重大な問題だから、もつと慎重の態度でやらに

や可かん。君は志村（喜久次の戀人の姓）の素性も品性も知らずに、只一寸顔が綺麗だから逆せてるのだからが、丸でお話にならぬ輕擧だ。は、は、は。」と附けたやうに笑つて、傍の圖按新報を披げる。

こんなに貶されると、喜久次も成程と感じて、心のどこかで戀すなと囁かれた。實際今日の場合、色よ戀よと騒いでは居れない。女色は立身出世の妨碍、碌でもない瓦を擲んでは、六十年の不作だと斥けて居られぬでもない。それに戀は兎角自恃が傷付きさうなので、彼は餘程臆病づいたが、刈屋がドシ／＼輕薄呼はりをして、斷念したまへと浴せるので仕方がない。決して浮氣ではなく、斯く／＼の至情だと自他を欺いて、此の戀が敗れる位なら、死んで了ひたいとさへ誇張的に語つた。刈屋は興醒め顔で、

『君はそんなに思込んでるんか。』

『さうなんです。私は未だ地位が低いから、心細いですな、どうも。』
 『其れはそんなでもないが、彼の女は何だよ、君。美術思想なんざあらりやしな
 いし、案外なものだよ。』
 『そんな事は後からどうにでもなりますから、どうか先生、周旋して下さい。』
 『まア待ちたまへ。君はそれちや何か、自分の満足さへ得たら他人はどうでも可
 いのか。』
 『私が満足したら、他も自然満足する譯でせう。人間はもつもたれつだから。』
 『いゝや、君が一人満足する爲めに、非常な悲境に陥る人があるかも知れぬ、其
 の場合によ。』

此の時襖の裏で咳拂ひが二つ三つ聞えたり。喜久次は、
 『そんな氣遣ひはありませんよ。』

「けれども君は志村に刎付けられたら、死んで了ふのだらう。夫れと同筆法に君に嫌はれて、死ぬ人がないとも限らぬが、其れを君は見殺しにするんかい。」

「大丈夫ですよ、そんな馬鹿な……。」

「だが若しあつたらよ。」

「仕方がないですな。」と眦に皺を寄せて、彼は頸窩へ手をやつた。

「ちやア君はどうするんか。」と相手の動止を睜りつゝ云ふ。

「私も仕方がないです、嫌はれたら。」

「華嚴の瀧へでも行くんか、困つたもんだ。」

「まアそんな理屈は仰有らないで、どうか助けて下さい。私は一生懸命なんです。」と涙含んで嘆願する。

「何しろ容貌が成つてるから、面倒だよ。箱馬車くらゐは夢みてるからねえ。」

「さうでせうな。」

「だから君、寧ろ裏面攻撃で運命を決したらどうか、さう熱度が高くツちや仕方がない。僕も機会があつたら盡力しやう。」

「難有う。夫れぢや遣つて見ます。」と彼は腕を扼した。

一 の 六

久松町から歸途に、喜久次は電車で江戸川へ来て屢々小日向臺町をぶらついた。一丁目の湯屋の處を廻つて、雌竹の小鍛蔭を越えて、半町程行くと舊世紀の長屋がある。夫れと正反對の嚴めしい鐵柵の門があつて、赤松の目隠しの向ふに洋風の邸宅が巍々と聳えてゐる。是れが志村の家で、二階の窓掛から燈火が梅の梢に洩れて、時に不調和な繪になつてゐた。あんな座敷に彼女は遊んでゐるの

かと、果敢んだり悶えたり、彼は紋切型に苦んだ。餘り通行人はないが、それでも往々此の屋敷へ出入する俥がある。荷車も通る、人間も通る、中には眠と尻目に懸けて行く奴もある。其の都度彼はすたく歩み出して、十人並みの風を装ふた。何故こんな馬鹿な真似をせにやならぬのかと疑ひつゝ同じ處を二度も三度も、拔足差足で朧月夜の星影を踏んだ。

其の内喜久次は、長屋の内に若い婦人のあるのを自づと知つた。或る夜私かに電信柱に凭れてゐると、さも娛しさうな笑聲が幽に聞える。窓には三角の太い棧と摺硝子の戸が締めてあるが、彼は盗人のやうに忍び寄つて、溝の石垣に翹足で、密と覗いた。窺ふ者には好都合の模様が摺硝子にある。下らぬ意匠も時には味な効果のあるもので、他の人も此處から垣間見た形跡がないではない。八疊位の粗末な部屋の向ふの障子際に、机が一脚と本箱、ヴァイオリンや繪具皿、杵な

33

どの縁由の品々が一寸眼に映る。十二三の少女を話し相手に、編物をしてゐる大きな庇髪の影が壁に動いてゐるのみで、顔貌は定かに判らぬが、どうやら彼女らしい。——やがて紛れもない彼女がふと此方を振向いた。喜久次はハツと飛び退いて、半無意識に逃げたのを後から悔んだ。もう一遍行きたかつたが、妙に氣が引けるので、つい夫れきりに終つた。

其の後も再三出て來たが、以前のやうに彼は得近寄らない。而して心の内では餘程彼女に近付いた氣で、彼の部屋にチラと見出した彼女の周囲の物を羨んだ。身分はさう違はぬと刈屋の言つた事情も解つたし、名は美代子とて、響きの佳い名前である。あゝ、美代子さん……などと獨言ちて、彼は來るべき機會を期つてゐた。

事の成否は別として精神のある處には機會がある。或る夕べ喜久次が人の群る

江戸川の橋に凭れて櫻を觀てゐると、美代子と島の令嬢（彼のち下げ）と女中と三人で雑踏の裡を歩いて行く。彼は千載の一遇だと直覺して、騒ぐ胸を鎮めつゝ、彼等の後を追ふた。夫れとは知らぬ彼等は何事かを話しながら服部坂を登る。あの女中は多分島のだらう、すると湯屋の角から美代子獨りになる譯だと特殊の智恵を得た彼は、刻限を計つて茗荷谷町の方から廻つた。切れ／＼な白雲に半月が朧ろに宿つた春の宵である。探るやうな微風は面を拂ひ、櫻の花びらがひら。

彼は志村の門前を越えて、ほつとした薄靄を冒して行くと、白の肩掛が先づ眼に付いた。二三間の距離に逼つて、

『志村さん！』と喜久次は飛び着いた。

彼女は尻と男を睨めて、黙つてゐる。

『僕です！ 僕です？』と震ひ聲で云ふと、美代子は握られた腕を振放して、

『あゝれ！……ちよいと！……あゝれ！』と叫んで、救助を求めつゝ逃げて了つた。

喜久次に残つたものは、彼女の二の腕の温味がほんのり、多時茫然としてゐたが、餘り管ないとかやがて感じて、其の次に怖氣立つて、何處をどうともなく夜道を歩き出した。あゝ、飛んでもない失敗だつた。突飛な事をした。……驚いて逃げたのは寧ろ當然で、嘸ぞ怒つたらうから、若し先生等に知れたらどうしやう？ 思へば非常な不敬だつた。残念至極だ。情けない話だ。……せめて書學校との關係さへなければ可いが、之れがどんな悪い反響を來すかも知れぬ。……謝罪するにしても、こんな失敗談は刈屋に持出したくないし、直接手紙

もやる譯にも行くまい。あゝあ、……………。

二の二

喜久次は電燈會社に居る柴崎と云ふ同窓の友に、豫てより何となく慕しげに思つてゐた島夫人へ紹介を求めた。柴崎は島（専務取締役、目下洋行中）夫人とは少々遠縁なので、委細構はず喜久次が云ふがまゝに、折入つて願用がある、云云の男だからよろしく頼むと叮嚀に認めた添書を與へた。

戀の曲者に囚はれた喜久次は、氣も慢ろ志村へ程近い島邸へ出向いた。直四角な花崗石の門柱、和洋折衷の玄關など自づと頭の下る壯麗な構へである。怖々彼がベルを押すと、豚のやうに肥えた家扶體の老人が現はれて、奥様に用なら彼方が廻れと横柄に云つた。

喜久次は指さされた方へ腰低に行つて、硝子の嵌つた格子戸を開けて、御免下

さいを二三度繰返すと、十五六の小間使が出て、

『誰方様で……』と手輕に云ふ。

彼は女關でと同じやうに名刺と添書を差出して、夫人に面會を乞ふと、昵々彼を見世物にして置いて、小間使は隠れた。傍の下駄箱の上に、顔の映るほど磨いた女靴が二三足あつた。

程なく喜久次は廣々した天井の高い座敷へ導かれた。朱塗の巻煙草箱が紫檀の卓子にちやんと載せてあり、灰皿には紙巻の吹殻が二つ三つ、小豆色の皮蒲團が四計り控へてゐる。床の間には格堂の若書きの「春景山水」が掛けてある。其れは素晴らしい表装で、月並の畫題ではあるが、流石に達者なもの、喜久次は勿體らしく眺めた。董や蒲公英の咲き亂れた野路の小川へ、馬が水を飲みに下りた處の圖で、彼には其の背景の霞棚引く遠山が丁度故郷の衣笠山のやうに見え、半

腹の糺糊たる寺院は西國三十二番の札所、觀音寺の趣きがある。畫中にはないが、故山の眞景は近江源氏の遺蹟が続いて、其れから安土山上の廢虚が湖畔に峙つので、頃しも彌生半ば、麥や菜種の仲仙道の並木を笈摺懸けえ順禮衆がチリンチリンと歩み行く連想をもなさしめた。態々訪ねて來た要談すら暫く忘れてゐると、後の襖がスート開いた。

『どうもお待たせ申しました。』と云ひつゝ夫人が入つて來た。喜久次は飛び下つて、どきまぎ挨拶をした。

『さアどうぞお當て下さいまし。』と徐ら座に着いた。一寸濼い常着羽織を引懸けて、左あらず對はれたのらしいが、如何にも氣位の高い姿勢である。彼は氣を呑まれて、之れは黙つて歸つた方が怪我なしたと思つた。

『貴方は柴崎さんと御懇意でゐらっしゃいますか。二三度田口先生のお宅でお目

「悪いたやうでございませぬえ。」

「はア、色々失禮致して居ります。柴崎君とは學校時代から親密にしていますが、突然どうもお邪魔を致しまして、恐縮でございます。」

「いゝね、どう致しまして。ですが、どういふ御用でございましたか。」

「はア、實は私………」と云つたものゝ。喜久次は胸奥の秘事を語り得る間柄ではなし、さりとして今更單に遊びに來たとも言へず、窮餘の策ではあつたが、突飛に突飛を重ねたと、はらく額に油汗を浮べた。

「若しか何でしたらお話し下さいまし、一向お役にも立ちますまいけれど。」と夫人は彼が餘り忸怩するのを見兼ねて柔かに促した。

それで喜久次は俯向きつゝ、美代子に加へた暴行の概略を途切れ〜語つた。夫人は時々驚きの眼を放つて、胸先を抑へながら聽いてゐた。

「私はどうも社交に馴れないものですから、斯う露骨に申上げたのですが、素よりこんな事を突然お願ひに上れたわけではございませんのです。唯どうも良心に咎められて困つてます。」

「其れは御道理でございます。彼女も多分驚いて失禮申したのでございませう。」

「彼の方の御立腹は勿論當然です。ですから私、貴女に一つお願ひ申して、私の微意を傳へて戴けまいかと思ふのです。如何でございませう？ 甚だ御無禮ですが。」と顔をあげて、夫人の動止を窺つた。

小間使が再び紅茶を持つて來て退いた。夫人は多少打解けて、眩しさうに相手を見ながら、

「貴方のお心にはほんとに御同情申しますがね、私は美代子の身の上には、一切干渉しない事になつてますから、何でしたら、端書でもおやりなさいました

ら……………」

『さうしますと、つい又色んな文句が書きたくなくなりますし、…………』

『夫れも御道理でございますわねえ。では何ですか、貴方はもう彼女のことは全然御断念なさるのですか。私は後日の連累になるとほんとに困りますから。』

『いえ、其のお氣遣は大丈夫です。今後は決して私、あんな非禮は致さぬつもりです。固々あゝしたことは他人事でも排斥してましたんで、私も少しは自重しなくっちゃなりません。』と熱心を面に現はした。

で、夫人は「此の場限りの事ならよきに取計はう」と肯つて、彼の境遇に就き夫れとなく訊いた。而して喜久次が歸る時、春雨がしば／＼降り出してあつたので、印の入つた蛇目傘を持ち歸らせた。

二の二

喜久次が突如に島夫人を訪ひ、戀の失策を語つたのは、彼自身も常識に缺けた突飛な行爲だと感じてゐる。併し彼女の身内だし、美術家に厚意のある人だから、此方の誠意さへ届いたら、感情に驅られた行詰りの活路が見出されぬとも限らぬと焦つたのである。而して最初から斡旋の頼める筈はないから、先づ近付きになるべく力めた。早速傘も貸しに行き、何か知遇を得る方法はないかと考へつゝ、若し彼の夫人の媒介で正式に結婚が出来たらと想像して、泡のやうな甘い空想に耽つた。成功さへしたら、一時の非禮くらゐは敢て構はぬ、名士偉人の生涯にも随分ある事だと思つてゐた。

或る土曜日に彼が畫板を擔げて、畫學校へと例の服部阪をば上つて行くと、ふ

と向ふから美代子が妹らしい小女の手を曳いてやつて来た。お納戸に白と燕脂色の矢絰を着て、頭髮は彼の好きな銀杏返しで、恰も名畫中の佳人が脱出して来たやうだ。此の間のやうに挑むには餘りに氣高いし、胸はどきどき、足元はわな／＼、眼を瞑つてゐると、彼女は既に横間へ逸れてゐた。

喜久次は慌て、後を見送つたが、洋傘を翳した其の下へ、岱赭色の帯が出て、桐くづしの紋型が和かな太陽に映えてゐる。四邊は青葉若葉の希望に満ちた新緑で、美代子は其の滴る目許で振向いた。其の桃色した顔や無言で語る眼眸を彼はどんなに見たらう？ もう學校へは行かないで、ふら／＼海月のやうな魂で歸宅した。

喜久次は様々に悶えて、言はれぬ義理とは知りながら頭島夫人に周旋を頼んだ。美代子に對する情愛やら自分の現状やら將來の抱負やらを色々書き連ねて、

六錢切手の長文を出した。而して彼は翌る日から其の返事を待ち侘びて、夕方疲れた足を引摺り歸つて、机の上に来狀がないと精を落した。

併し彼は決して懶けはしない。此頃は白子屋の方も忙がしいし、京都から嫂の實兄が商用で上京するなど煩ひが多かつたが、毎夜油の盡くる頃まで勉強した。或る日喜久次が重い頭腦で刈屋を訪ふと、細君は待ち兼ねてゐたやうに彼を椽側へ請じた。三坪程の庭には躑躅が盛りと咲いてゐる。是れが此處の最も光彩を放つた期節なので、汚れた無宿猫が隣の庭續きへと露の葉を踏んで竹垣を潜つた。細君は青筋の張つた冬瓜色の乳を赤ちやんに哺ませつゝ、

「此の間ねえ、長谷川様のお宅で鳥さんに會ひましたらねえ。」と怖ろしく眼を光らす。

「何とか云つてましたか。」と喜久次は胸を躍らせた。

『さう。』と力を入れて、

『彼の方にあんな事お頼みなすつては可けないぢやありませんか。そら同情に富んで被居るから、どんなにか御心配なさいますよ。貴方のことも正直な方だつて大層褒めてゐらつしやつたがねえ、貴方のやうにさう美人でさへあつたら、誰れでも可いといふ譯に行きませうか知ら。あの美代子さんはねえ、——私、こんな他人の秘密を許したくはないけれど、——彼の人ねえ、奥様（島夫人）のお父さんのお妾の子なんです。未だ仇ッぽい方がゐらつしやいますよねえ、あんな内儀さんに後日出入されちや、貴方のお人柄に係つてよ、ほんとに。』

『え、お父さんはねえ、二三年前にお亡くなりなすつた。私達お葬式に行きましたわ。其のお妾の爲めにねえ、全然身代を耗つちやつて、晩年は島様に同居してゐらしたの。美代子さん等はねえ、母親に仕込まれて、御本妻に死ねとか、何だ

とかそれは苛めたのですつて。奥様の身に取つちや、忍び難いことでせう。大きくなるかねえ、あの姿色だもんだから、彼方でも此方でも男子のお友達をこさへて、色んな風聞を流すんですもの。もう仕方がないから、實母さんだけ島さんに置いて、お妾と彼の方達を御親戚の長屋へお預けなすつたのですよ。それでもどうにか立派な婦人に爲たいつて、鶴子（彼のお下げ）さんと御一緒に學校へ上げたり、随分とお世話なすつていますよ。ほんとに島さんはお偉い。どうです、小池さん、お解りなすつて？』とすらく喋つてのけた。

喜久次は剣られるやうに感じて、萎然椽柱に凭れてゐた。細君は眠り付いた赤ちやんを寝かして、茶道具を運んで来て、出がらしを一杯彼に侷めて、また攻めかける。

『貴方は、島さんにもう断念すると仰有つたぢやありませんか。』と流石に顔を

紅めた。

「え、ですが、私は直接あんな事はもうしないと云いたわけです。」

「でも奥様はあの場限りの條件で、貴方に御承諾なすつたのでせう。」

「其れはさうでした。」と彼も顔を紅らめた。

「一體貴方は幾ら貞操のない婦人でも、容色さへ佳かつたら可いのねえ。……そんなら寧ろ藝者になさいましな、其の方が餘程粹ですよ。」と恥ぢしめるやうに云つた。

喜久次は濃い眉を顰めて、「敷鳥」に火を付けた。細君は煙草を喫かされると横を向く。西に傾いた太陽は向つて右手の三階建の下宿屋の棟を這つて、隣の庭樹に當つてゐる。込入つた華かな新緑の色彩は多くの畫家を惱める自然美だが、若楓に不調和な雀が二三羽チュン／＼鼓翼いてゐた。彼が「貞操のない女は魂

のない人間だ」と呟くと、「さう解つてあるのなら、薫さんをお娶ひなさい。貴方の爲めに、貞操を守つて被居る」と切込む。

喜久次は嘯いた。

「だつてあの年齢まで獨身であらうしやるぢやありませんか。」

「其れは病氣の所爲だと、現に貴女が仰有つたぢやありませんか。」

「さうでしたッけねえ。」と細君は恍けて、

「矢張りお多福に生れ付いた者は詰りませんよね、どうしたツて。」

「そんな事はないでせう、人の審美眼は夫々違ふから。而して後天的に美を助成せん爲めに、非常な人力が消費されてますよ。ねえ、奥さん。」と即座の所感を喋つて、鬼も十八とはよく云つたもの、餘り心の濁らぬ内に然るべく縁付いたが可い。配偶者の年齢も亦一大條件ではないか。マックス、オーレルの著書に、男の

數を二除して、其れに七を加へた數が妻の年配に適當ださうだと書いてあつたな
 どと、彼は努めて細君の鋒先を挫いた。

細君は庭の方を見てゐて、

「え、ですから、貴方。彼の鶴子さんはどうです？」と全く木に竹籬いだやうな
 謎を云ふ。

喜久次はぼつと呆氣に取られた。無暗と他人の戀に輕卒呼はりをしてゐながら
 如何にも粗忽な話しをする人だ。島夫人には敬慕してゐるが、鶴子をどうとも別
 に考へてゐない。

「あんな大家の令嬢を……。それに年齢も何だし到底其の……。」とうやむや
 に獨言ちた。

「十七ですよ。どうしたツて貴方、立派な家庭に育つた方でなくツちや、所詮駄

目ですよ。」

「其れはさうでせうが私はあゝ云ふ富豪と縁組の出来る身分でないから、夫れこ
 そ駄目です。申談にも程がある。」と丸で耳をかさなかつた。

其處へ刈屋が工業學校から歸つて來た。細君は何氣なく退陣する。喜久次は去
 就に迷ふたが、刈屋に引留められて、一問題を提供された。關西に良い口がある
 から、行つて見ないか。君等の立場では洋書を生嚙りするよりも、京都、奈良の
 古美術に精通すべしだと徳憑するのである。

彼の偏見かは知らぬが、其の裏面に横はつた或る物が透視くので、喜久次は殆
 殆返答に窮した。夫婦の意志の別不別は兎も角、斯う情實に絡らまれば堪らぬ。
 之れが厭やさに前から不利益をも忍んでゐるに、どうしたものかと、只々家庭
 の現狀が許さぬと云つて、苦しく避けた。

刈屋は藪叢の眼を眼鏡越しに光らせつゝ、

『夫れは僕も知つてるさ。けれども君は其れに満足してゐないだらう。』

『無論ですとも、前途は遠遠です。』

『そんなら、戀だとか女だとか騒いでゐちや矛盾ぢやないか。此の間はあゝも言つてゐたが、僕は多年の友誼上實際殘念だ。洋書科も今學期限りで一先づ廢すと先生はいつて居られるからねえ。洋行でもする基礎を作りたまへ。でなけりや失敗だよ。』

『是非さうしたいのですが、私はどうも當分仕方がないのです。色々先生の御恩になつてゐて、毎もお言葉に背くばかりで申譯がありません。とうぞ先生、お許し下さい。』

『いや何有、………。さア冷靜に考へて見たまへ。』と刈屋も其れ以上追究しな

かつた。

IIのIII

喜久次は豫め葉書を出して置いて、或る日一枚の習作を携へて島邸を訪ふた。彼は苦しさに情々顧みるに、自分の求婚問題は未だ時期でないと見えて、一つとして碌な事はない。抑も薫云々を刈屋夫婦に打聞けたのか大失策で、昨今の島夫人に内情も知らずに美代子の執持を頼んだのも亦頗る不味かつた。で、斯の件は一先づ撤回して、同趣味の夫人等との交際を得、上流社會の空氣にも觸れてみたい。今迄は別に求めもせず、従つて知人もなかつたが、何しろ清爽な座敷で上品な婦人と藝術談を交すなどは決して悪くない。と云つて、美代子を忘れたのではないが、固々外形美に魅せられて、潜んでゐた慾望がふと對象を得たに過ぎぬ

ので、側からあ、妨げなかつたら、實はさう熱するのではなかつた。且又單純に接近し得て、徐ろに歩を進めたら、斯うも悶える必要もなかつたのだ。果して彼女の悪評が幾分事實だとすれば、他所ながら眺むるに止めたい花であると、冷かに内省して、戀に悩む弱者の境涯を脱しやうとする氣分で客間へ通つた。

今日は床の間に、文晁の和蘭繪の影響を仄めかした畫に五山が賛をした幅が掛けてある。矮拍の盆栽は鬱陶しい天氣にしっくり合ひ、向ふの縁先には綺麗な西洋の草花が二三種見える。カランと開放された中庭の樹々は厭といふほど黒ずんで、落付き拂つてゐる。

程なく年増の女中と共に、鶴子がしづ／＼入つて來た。喜久次は面喰つて、變な挨拶をした。女中は彼に紅茶や菓子を侷めたり、風景畫帖などを運んで置いて退いた。彼は此の間刈屋の細君から餘計な事を聞かされて、爾來鶴子を裡腦の

何處かに宿してゐる。其の彼女が獨りになつたので、彼は半生涯に類例の乏しい道中に差蒐つた。兎に角鶴子は美代子でない丈けに、下手に歡心を買ふては浮薄な男と思はれる。一體どういふ了簡でこんなに欺待されるのかと、密と覗けば彼女も亦、二重瞼の涼しい目許をぼつとさせて、伏目で此方を見てゐる。もうお下げがマガレットに進化してゐるが、額が稍潤きに過ぎて、鼻筋には些と飼面がある。けれど決して醜い邊りではなく、よく雑誌の口繪などに見受ける新しい型で、梨の花のやうな感じがした。ネルにメリンスの被巾を重ねた質素な服装だが、それでも赤ッぽい半襟に小豆粒ほどの眞珠が光つてゐた。

彼は寫眞帳を見るとなく見ながら、

『何かお描きになりましたか。』と所作なげに問ふと、

『いゝえ、私なんか。』と澄して云ふ。

「其れは御謙遜でせう。熱心に書校へゐらっしゃるぢやありませんか。」

「只ほんの餘暇にお邪魔するだけなんですもの。それよりかどうぞ拜見！」

「何をですか、しめやかな天氣ですね。」 拙な、遁げた。

鶴子はつんと拗ねて、縫のした手巾を膝の上で弄る。それで彼は習作を展げるか、何か恰好の話題を持出さねばならぬ。咄嗟の趣向で、

「京都へゐらっしゃいましたか、近頃。」と云つてみた。

「え、貴方のお國へも……。」

「私の國を御存知でしたか。……それは、どの邊へ？」と喜久次は何だか嬉し
かつた。

「あの大阪の伯父さんとねえ、大津の近所を見物しましたのよ。三井寺はほんとに佳い處ですわねえ。」とにっこりとする。

其處へ母夫人が見えた。手輕に挨拶が済むと、鶴子は夫人の旨を受けて、一枚の油繪を持つて來た、喜久次は恭しく拜見したが、明るい色の並木である。

「誰方のお作ですか。」

「長谷川さんのよ。コロの筆法にお憑りなすつたのですッて。」と鶴子が説明する。

「どうも鮮かですねえ、實に雄大な並木です。」と努めて感嘆を洩らす。

「あの柳なんかは殺風景ぢやありませんか。因循で可けないッて、初中終良人が申すんですよ。半年は枯れつちやいましてね。」

「さうですよ。併し日本の風景から柳を取去る譯にはいかぬでせう。あの内幸町のは一寸大きくつて、可なり趣きがありましたッけ。」

「然う仰有ると、昔は柳の大本があつたやうですね。」

『さうかも知れませんが、三十三間堂棟木の由来なんて傳説がありますから。何でも甲州の新善光寺のは男に化けたと云ひますが。矢張り柳は女性の方が可いやうです。ねえ、は、は、は。』と面白さうに笑つた。

鶴子は彼の匿して置いた繪を披けて、「おや、まア」と仰山な聲を立てた。喜久次は多少遮ぎつたが、二人は卓子の上で、好奇の眼を睜つて眺めた。夫人はこつと紅くなつて、

『人物畫をおやりなさるんですか。』

『さうとも限らぬのですが、一寸稽古して見たのですよ。丸で未だお話になりません。』

『い、え、結構ですわ。衣裳の模様なんかは流石にお手のものですねえ。』
『唯繪具を塗抹つただけですよ。』

『美人崇拜ねえ、貴方は！』と鶴子が臆面もなく雑返した。

こんな安排で、喜久次は肝腎の要談へは一步も寄らずに辭し歸つた。彼は島の母子が自分に一種の感想を懐いて、あゝ接待ふたのでなからうか。若し友情を垂れて厚遇されたのなら、願つたり叶つたり、こんな嬉しい事はないが、若しさうでないならば、日外の刈屋の細君の言葉に多少根據があると推測せざるを得ない。さればとて如何に自惚れても、彼等が自分如きを格別愛しさうな筈もないし、これも矢張り美代子を離間する方便ではなからうかと思ふと、彼女が戀しくつて堪らなかつた。美代子の美貌と鶴子の境遇とが天秤に懸つて、上つたり下つたり、前者を後者の地位に置きたいと望んでも、畢竟空想のみでどうする事も出来なかつた。

其の内に亡兄の祥月命日が來た。家では彼の寫眞や軍服を飾つて、滿洲の野に

屍を曝した戦死者を偲んで、幽寂しい紀念會を營んだ。兩親共宗教には極く淡い性質だが、近頃權七は橋本に導かれて、お藤と共に時々教會へ行く。喜久次も刈屋に勧められて、曾て説教を聴きに行つた事があるので、多少基督教の話が出た。而して權七は「斯う遊んでゐては神の御心に背くさかえ、何か商買を始めやうと思ふがどうぢや。一ツ橋通町に文具店の讓物があるが、あれなら餘り儲らぬ代りに損もいくまい」と相談をした。之れに不賛成者はなかつたが、讓店の件は價格の相違で容易に纏らなかつた。

段々と白っぽい装束が市中を横行するやうになり、涼しさうな氷店が方々に現はれた。お藤は脚氣に罹つて、鈴江の紹介で平岩といふ醫院へ通ふてゐた。院主は刈屋の細君等と同じ教會員ださうで、聞けば島夫人も其處の信徒であつたとか、喜久次は三崎町の教會に知人の増えるのを不審に思つた。夫れはさうと彼は、矢

張り美代子を忘れ兼ねて、所詮島の手で行かぬものなら、他に方法を講ぜねばならぬ故、夫れとなく夫人へ暑中見舞を出した。すると逗子の別荘から返事が來た。彼は一日身輕に出掛けて、夕方晩く歸つて來た。

二の四

永らく紛紜いた文具店は到頭讓受ける事になつて、八月の酷暑に喜久次等は引越をした、二間半間口で奥行は六間あまり、押入附の八疊の二階に小三尺の縁と物干臺がある。隣の下駄屋が同國の出身とあつて、何くれ世話をしてくれた。向ふ側には足袋屋に糸屋、唐物屋などが連り、四五軒先きに支那料理店がある。それで膏脂臭い逆かるやうな匂がするし、近所では南京蟲が居るとて啣してゐた。月末になると、地方から歸つた學生や新上京者の爲めに、毎日筆墨、インキ

ノートブック其他の小商ひが可なりの額に上つた。一家の者はほつと一息吐いた。殊に喜久次は斯う働いてさへゐたら、早晚餘裕のある境遇に成れやうと愉快に思つた。暑さに負けて、心身の活動が弛むと、思ひに浮ぶものは返子へ行つて、世間放れて夫人と對座した時の事である。彼は何方とも着かぬぶら／＼の頭腦で行たのだが、忘れぬ色んな會話があつた。

「もう斷念するツて、眞實ですか」

「單に一時の感情でした」

「實際彼女はねえ、貴方に不適當ですよ。期つてさへゐらしたら、私が屹度適任者をお世話して上げますわ」

「夫れこそほんとにですか」

「え、義理の弟だと思つて」と云ひさして、何物をも惜まぬやうな表情をし

た。

島夫人の胸中は喜久次も想像に餘つたが、何か神秘的な連鎖があつて、深い關係が生じさうに思つた。美代子の影は暫く潜んだ。九月の始め彼は、もう歸京したらうと推測して島邸に訪れた。

例の座敷へ通ると、夫人は色のぞす黒い瘦ぎすの男と對話してゐた。紹介されて、電燈會社の副支配人だと判つた。矢張り此處の實戚ださうで、小林と云ふ紳士である、喜久次は電氣科の設けられた初期の卒業生に、此の姓名のあるを思ひ出た。彼は冷かな眼を放つて、探るやうに喜久次を視て、殆んど彼の存在を認めない。夫人は陰かに彼の味方をして、云々の青年だと執成された。

「奥様、近頃文具屋を始めましたよ。」と彼は最近の變化を語つた。

「ちやく、さうですか。」

「随分方々で見受ける商賈だが、儲かるかねぬ。」と小林は茶がかった太い髭を捻りつゝ口を入れる。

「はア、少々は賣れますが、何分副業的なものですから詰りません。」

「だが、さうでなかつたら、君の修業が出来ないだらう、まア確りやりたまへ。」とくるりと顔を背向けた。

鶴子は向ふの縁先に半身を現はして、此方をちつと見てゐた。夫れと氣付いた喜久次は、早く小林が歸れば可いと思つたが、彼は島重役の歐米の旅程などを喋つてゐて、容易に動きさうもない。で、彼は是非なく芝居の看板だけ見て歸るやうな心地で座を立つた。夫人は氣の毒さうに送つて出て、ごうも失禮をと密々云はれた。

喜久次は小林に悪い印象を與へたらうかと案じつゝ、門を出たが、鶴子が女中と

共に竹んでゐた。

「佳いお天氣ですぬえ。」と間に合せを云つて、彼はごきまぎしながら叩頭をした。

「もうお歸りなさるの？」

「はア、先日はごうも失敬致しました。」

「いゝえ、私こそよ。」とぼつと上氣して、滴る汗を流れるやうに寄せた。

是れ以上語る勇氣もなく、喜久次は残り惜しさを立別れた。此頃では追々と彼女に美代子の座を占められて、若し自分の意志を貫徹さへしたら、何時かは麗しい愛の實が結ばれやうと思つてゐる。此の感想のみでも、彼は非常に活力の湧くのを覺わつた。次第に物質の壓迫を感じ行く彼は、妾腹の美人よりも慕しい両親を有つた良家の令嬢の方に勢ひ傾いた。

二の五

洋畫科が中止されたので、喜久次は今學期から階下の日本畫科へ仲間入りをした。廣間の薄緑の上に輪になつて、十數名が植物などの寫生をするのが重なる學課である。假張や繪具皿、刷毛、筆等の散らかつた體裁は、宛然子供玩具箱を打開けたやう、生徒の中には以前からの知合ひもあれば、新しい色んな男もある。彼は隣室の女子部へ鶴子の來るのを私かに樂んだ。始中終美代子と一緒なので、何の機會もなく平氣を装ふてゐたが、だん／＼鶴子の美しく成る代りに、美代子の嫉んだやうな表情が醜くなつた。曾て如彼に逆せて置いて、今は他に思ひがあれば全く違つた意味で冷かに眺めてゐる。假令方々から惡評されたにもせよ。何の應酬も得られなつたにせよ、之れでは輕佻浮薄だと貶されても仕方がないと、

我ながら愧づる時もあった。併し四方八方物色して寫眞を取寄せたり、双方から勝手な打算で撰擇するのが普通でないかとも思つた。

新嘗祭の休日に、新宿の十二社で畫學校の關係者一同の親睦會がある事は、前以て揭示されてあり、生徒間の話題になつてゐた。當日喜久次は上野の展覽會へ行つて、午後から其方へ廻ることにした。今年始めて文部省の展覽會が開かれたので、現代の美術の精華が一堂に蒐められた。其等を覽た彼は、感奮の餘り四五日も靜坐してゐたかつたが、來年は一つ傑作を出さうと考へつゝ、十二社へ來た。すると黄ばんだ葉櫻の幹へ目鼻を描いた繪を張つて、其れを大の男が一刷づつ塗りに行く遊戯を演つてゐた。やんやと周圍の見物は手を拍つて囃す。こんな事は嫌ひなので、彼は其處等をぶらついた。葦籬張りの茶屋の休憩臺に婦人連が子供達と辨當を使つてゐる。今日は所謂格堂宗一派の總出と見えて、中々の人數、

島夫人も鶴子も其の妹も美代子も無論來てゐる。彼は一寸夫人に會釋して置いて、稲垣といふ幹事の家族の側へ腰掛けた。毗に小さい黒子のある小柄な奥様で、喜久次は多少懇意である。

『よく來らツしやいましたねえ、お一つ如何が？』と奥様は海苔卷を脩めた。

『難有う。』と彼は早速頬張つて、傍の五つばかりの坊やの頭を撫でた。京都にゐる甥（亡兄の遺子）も此のくらゐになつたらうかと連想して、重苦しい感に打たれた。

奔走家の稲垣はにこ／＼やつて來て、

『やア、君は今かねね、どうも遅いなア。』と煎餅の袋とプログラムを渡して、急彼方へ行つた。

刈屋の細君は今日見えぬとか、長谷川教師は鎌倉へ轉居したとかいふ話を、暫

く彼は奥様に聞かされてゐたが、煎餅を坊やに握らせて其處を辭した。鞭聲肅々／＼の詩吟をやつてゐる。洋行する噂のある丸屋が、寫眞機を向けてゐた。喜久次は微笑を洩らして多摩川の堤へ出た。

紺碧の空には、白ツほい雲片が際立つて二つ三つ、透き通つた感じの可い小春日和である。千草の匂がふんはりして鈴のやうな蟲の音が佳調に聞える。彼は野菊の可憐な花を摘んだり、櫟林に秋の靈氣を味つたり、鶴子が抜けて來ないかと思つたりしつゝ、浄水場の水門に行當つて、徐々歸らうとしたが、流石に見棄てかねて、後振返つた。すると何だか作つたやうに美代子が、一人すた／＼現はれて來る。其の向ふの木陰に、鶴子が此方を見てゐた。

親睦會のあつた二三日後である。喜久次は雨の夜を冒して島夫人を訪ふた。今宵は鍵の手の段梯子を上つて、長い縁側をシト／＼婦人の居間らしい座敷へ通された。十疊あまりの洋風を加味した構造で、タングステン電球は眩ゆく、下手は化粧室と見える。装釘の立派な書籍や小さな石膏の像などを並べた床の間を横に時代の付いた總桐の机を据ゑ、其の前には毛皮が敷かれて脇息が控へてゐる。喜久次は長押の額など眺めてゐると、夫人が音高く上つて来て、

『どうもお待たせ申しました。』と粗略な挨拶をする。

其の様子が如何にも不穩なので、彼はぼんやり相手の藍鼠の半襟を眺めた。

『何か御用でしたか。』

『はア、少々申上げたい事がありまして、どうも失禮致しました。』

『では伺ひませう。』と夕立のやうに迫る。

『十二社では、どうも失禮致しました。』

『いえ、それで……………』

『あの時にですな。』と彼はやぶれかぶれの氣味で、

『私は……………私は志村さんに會つたやうな形になつたのですが、決してさうではなかつたのです。もう仕方なしに、這々の體で逃げたのです。』と苦しげにやつてのけた。

『其れは嘸ぞお楽しみだつたでせうねえ、戀しい彼女に口説かれて。おほほ。』と冷かに嘲笑する。

喜久次は落膽りして、ハラ／＼雲脂を落しながら、

『そんな事なら、私は今晚此處へ伺ひませんよ。』

『そらさうでせうとも、貴方の考へて被居るやうに、さう／＼女は自由になりま

せんからねえ。』

『ですから。』と通り来る悪感情を抑へて、

『何もさうつけく、仰有るには當らぬぢやありませんか。私は彼の方に會はないやうにしたらと思ふのです。會へばつい考へますし、私の精神は日外貴女に申上げた通り、ちやんと定つてゐるのですから。……つまり私は、暫く書學校を遠ざかつたら可からうと思ふのです。』と情けなさうに顔をあげた。

夫人は意外な顔付で態度を變へ、

『そりやまア、眞實にですか！』

『虚偽は言はない積りです。』

『では斯うなさいましな、土曜日だけはねえ、當分夜學部へでもいらしやいよ。貴方がさう實を見せて下さると、私、ほんとに嬉しいの！ 今迄ぢや全く譯が解

らぬのですもの。』と射るやうな流眼をくれる。

『書學校なんざそんなに必要ぢやないから、どうにでも勉強はしますよ。』

『さうですよねえ。ですが、私の方からは彼女に何とも言へないンでせう。それで私、ほんとに困つちまつたのですよ。普通の學校だけが辛となンですに、無暗と出しゃばるンですから、何處かへ預けやうかと思つてましたわ。——そりやねえ、幾干残つてませうとも、女は一度愛されたと思つたら、一生忘れませんから。』と貴夫人にあられもない態をする。

喜久次は視覚が錯亂したかと驚いた。人は外見に依らぬものだと言はれたが、實は書學校を遠ざかる意志はそんなになかつた。近頃重ね々不興を蒙つてはゐるもの、格堂先生との關係は左程薄弱ではない。只取越し苦勞ながら氣に懸る疑惑を解いて、夫れとなく自分の心事を告げたい所存で來たのだ。併し案外

に邪推してゐた夫人から追究されて、臨機の噓止策に手近い持物を投付けたに過ぎぬので、事件は飛んでもない横道に逸れかけた。

『それでは書學校を休みますからねえ、どうぞ奥様、私の胸中をお察し下さいよ。』と彼自身にもどう察して貰つて可いか駈と解らぬのに、しみぐと云つた。

夫人は急所を衝かれたかのやうに胸先きを抑へつゝ。

『そりやもうねえ、貴方、どんなにか思つてますよ。若しか貴方を何でしたら、お手紙を下すつても返しますし、來らしても會ひませぬわ。』

『何しろ私は地位の低い男ですから、どうも何ですよ、境遇の隔りが多過ぎますからねえ、……………』

『もつと低い方にだつて、幾らも交際つて上げてますわ。』

此の一言に喜久次は慄然と縮み上つた。

三の一

喜久次は家族と共に食事をする機会が少ないが、今日の天長節は雨風で全潰れ夕方から見世を鎖めて、一家四人が稀しく食卓を圍んだ。食後權七は煙管を咬へながら、家は代々仙臺藩の足輕で、祖父一代の仕事は宇治の茶壺を麻布の本屋敷へ宰領して來たのであつた。鐵砲自慢（郷里の土藏には其の創造に係る種ヶ島が幾本もある）から彦根藩の鷹場へ鴨打ちに行つて、大騒動を惹起げ、同行の二人を他領せしめた。晩年千兩富の堂本をして、閉門され、寺子屋をしてゐたが、其の内に御維新になつた。三代先には京都の書家から嫁いでゐるとか、本家の伯父（一昨年死んだ）は若い時半月宛二條城の門番に行つてゐたとか、自分が一代經て來た道筋などしめやかに物語つた。

喜久次は初耳の節もあつたので頗る興味を覺えた。

『夫れぢや宅の系統にも藝術家の血が流れてあるんだな、こりや面白い。』

『然らぢや、汝もまア一心にやれ！ 中途で棒を折らすなよ。汝は小才が利きすぎるさかえ、悪くすると大それた事を仕出來す。ほんでに俺は餘り學問をさゝぬが可いと思ふてたが、此頃のやうでは案せる程でもない。放蕩者の出來るのも、皆な親の心からぢや。けんどもなア、喜久次、書工は一つは稟生ぢやぞよ。——ほら一心の力は偉いもんぢやて。一心にさへなれたら、どんな事でも出來るが、其の一心には並み大抵の者に成れぬのぢや。ほいてなア、よう聽いて置け、人間は色の道にさへ迷はなんだら、ほないに難儀はせんさかえに、小愆正直に腹を据ゑて掛れ。お藤、汝もよう聽いとけよ。』と諭すともなく云ふ。

お藤は平氣で頷いたが、喜久次は犇々胸に迫るものがあるので、山樂も友松も

同郡の出身だ、彼等を凌がにや措かぬと、空威張りに威張つた。

『まア其の位に思ふて、可い加減ぢや。如何程大かい事を考へても、世の中のこととは其の一分通りにも行きやせん。其の代り運が善いと、思ひの外的事が出來る。』

『うん、僕は必然やるから、まア、お父さん、見てゐて下さい。』

『お、見るとも、我が子の出世を願はぬ親はない。』と眼を瞬いた。

喜久次は二階の机場へ来て、頭髮の毛を撈つて感慨に耽つた。先夜彼は島夫人と不味い會見をして、どうも無條件で畫學校を退きかねたので、成功の曉には鶴子を許されるのかと云ふ意味の手紙を出した矢先きである。で、父の言葉が色んな事を思はせる。若し希望通りに行つた處で此方に夫れだけ確な成算があるでもなし、何だか生涯の危機に迫られてるやうな心地がして、寢てからも夜明方ま

で懊惱した。翌る朝正午前に起きて、朝飯を喰つてゐると、権七とお藤は教會から歸つて來た。妹は店にゐた母の傍に坐つたが、父は彼の側へ來て、

「汝は目惚が強いさか心配ぢや。」と何時にない蒼い顔色で云ふ。

「大丈夫！ お父さんも随分自信が強いだらう。」とつい答へると、

「けんども俺は、是迄氣狂ひにはならなんだ。危ないぞよ、餘り周章てると。まア、物事は靜にやれ。何でも時節を俟たなあかんほん。」と云ひつゝ、彼の頭を撫でた。

「え。」と箸を放して、彼も亦父の禿頭を撫で返した。

母は食事拵へに臺所へ來た。喜久次は圖書館へ行くとて店へ出て、お藤に「切符を何處へやつた？」とぶつゝ四邊を探す。

「だつて、知らないもの。」

「物を問はれて、知らない奴は馬鹿だ。」とがみつゝ。

筆を買つてゐた客が、彼の舉動を不審さうに見て行つた。

「まア、然うやかまし云ふな。此處に有つたは。」と権七が汚染になつた閱覽券を裏の埃取箱から拾つて來た。

喜久次は其れを勿體なげに受取つて、只つた今餘り周章てるなど云はれたにも拘らず、とつかは圖書館へ行つた。けれども彼は一日讀書に身が入らず、夕方傘の飛ぶほど風が荒吹き、冷たい雨の未だ歇まぬ不忽池畔へ差蒐つた時、島夫人の泣き沈んだ幼影を見た。

家に歸ると権七は或る成功雜誌を讀んでゐたが、

「こんな日でも、圖書館へ行つとるか。」と大きな老眼鏡を除した。

「え、そりや澤山……………」

『皆な勉強しよるなア。俺等の若い時は、生計に追はれたさかた失策ふたわい。野良へ行つても、書物は放さなんだが、應帝の煙草入を買ふのに、半年働いたぞよ。伊勢詣一つ親父にさして貰はなんだ。ほんでも是れから俺は勉強する。人間は苦勞せんとあかん。』

『さうなさい、日本人は一體に早く老込んでいかん。』

『俺は老耄れぬぞよ。親父も死ぬまで書の稽古してらつた。』

『まア何しろ、大人物は四五代前から準備されて……』と斯う袴を脱ぎながら話してゐると、母が階下から、

『喜久、早う飯にさい。もう皆済んだのぢや。』と云つたので、彼は父の言葉を考へくゝ食事をした。而して店へ出たが、鳥から嵩高な封書が届いてあつたので、其處にゐたお藤を遠ざけて、手を顫はして封を切つた。

81

無念な事があればあつたものだ。彼が曾て送つた信書を悉く突返して、中に一枚鉛筆の走り書が入れてある。出来る丈け心を鎮めて讀んで見ると、

「……貴方のやなう犠牲の念の強いお方の愛には、到底私共は償ひませぬ。お志は何ですが、私は甚だ粗忽であつたと悔いました。それで今後は決して鶴子に關しては、何にも言つて下さるな。彼女には許嫁があります。若し娘の身の上になら、お手紙もお訪ねも私は一切謝絶致しますから、どうか結婚問題を入れて、後日清い御交際を願ひます。こんな失禮なお断りしても、私は貴方が御承諾下さる事と信じます。而して畫學校との關係も喜んで、絶ち下さると信じて疑ひませぬ」と譯もなく書いてある。彼は暫く茫然として、帳場に俯向いてゐた。

何處かへ一寸出て行つた權七は、頭腦が痛むと云ひつゝ歸つて來た。

『どうしたの?』と喜久次が問ふと、

『うん、痛い!』と眞蒼な顔をして、二階へ上つた。お藤も母も其方にゐると思つて、彼は其の儘手紙を繰返して讀んだ。どう退いて考へても、氷のやうな冷たい悪感が浸みて堪らぬ。畫學校との關係を喜んでお絶ち下さる事とは何だ? 斯うなつちや意地でも行けぬ。敢て結婚を申込んだのではなし、縁談は先方の自由だから仕方はないが、些とは自己の言行に責任を帯びて、美代子を縛つた繩を解け、何故解かぬか? 許嫁のある娘に水向けさして、妾腹の義妹を呪つたのか!! かういふ傲慢な仕打をされさうだから、あゝ手紙を出して氣を引いて見たのだ。噫、欺かれた、騙弄されたと激して——悲憤の涙に咽んだ。而して、満らぬ事になつたと次第に落膽してゐると、

『喜久! 早う金盞を持つて来て下さい。』と頓狂に叫ぶ母の聲が聞えた。

彼は二階へ行つて見て、はつと驚いた。お藤は父の脊中を小擽つてゐる。母はあろく。

『吐かはそのやがなア。……さア、お父さん!』と金盞を顎の下へ當てがふ。

『こりや大變だ、醫者呼んで来うか。』

『あゝ、早う!』と苦しげに顔をあげて、權七は喜久次を見た。

彼は氣も漫る店の戸を叩いて、平岩醫院へ駈付けた。幸ひ直ぐ同道を得たが、父は其の時に醫師の訊く容體にも答へられず紫色の唇で一種異様な高熱をかいて、仰向けに寝てゐた。

平岩醫師は一寸診た丈で、太い眉根を寄せた。喜久次が様子を尋ねると、

『腦溢血です、困つたですな。』と他へ聞えぬやうに囁いて、

『宅へ行つて、灌腸器を持つて来てくれませんか。而して中島さんと云つたら解

るから、電話を掛けさして下さい、氷屋へも早く行つて貰ひたいが。』とさも當惑の體である。

お藤を氷屋へ遣つて、彼はあたふた醫院へ走つた。二三分間待たされたのをやきもきして、途中でひよいと鳥の事を考へて、其處邊りかと宙飛んで歸つて來た。が、瀧腸を施す暇もなく權七は、グウーと二聲高く唸つて、けろりと死んで了つた。

二の三

中島と云ふ醫師は後馳せに來られて、家の者に一寸挨拶して行かれた。平岩醫師は職掌以外の同情を表されて、色々宗教的に遺族を慰め、夜更けて歸宅された。

後で母子三人は、亡軀に取着いて泣いた。就中お絹は、

『もう一遍物言ふとくれ、お父さん！ 未だ誰も治つとらぬし、妾はもう悲しい!!』と正體なく掻口説く。

多時經つて喜久次は降つて湧いた災厄に耐え切れず、自己を客觀化して、今更幾ら泣いても仕方がない、こんな時こそ男子は泰然と構へるものだと思つた。

『お藤 汝は靈魂の不滅を信じてるぢやないか。何も運命だ、餘り泣くな。』と妹に云つた。

『えゝ。』と彼女は唯泣いてばかりゐる。

『もう是れが壽命ぢやわいなア。お父さんは昨夜からちやんと知つてござつたのや汝等は可哀想に……。』

『いや、僕等よりお母さんが何だが、まア今夜は寐やうぢやないか。火葬にして、

國へ歸らうなア。』

『妾も然う思ふてる、伯母さんだけ来て貰はうか。』

『あゝ云ふ人は出悪いから、まだも京都のが可いが……。』

『お春(嫂)が来てくれやるとよいけれど、妾は何やら恥かしい。こんな小さい家で、汝(おまへ)ほんでに東京は嫌ひやと云ふたのぢやがなア、なむあみだぶ。』と復た正體なく愁嘆する。

喜久次は母を勵まして三十餘年も連添ふた夫の側へ伏させた。雨は時々繁吹いて、淋しい雨雫の音が耳に響く。お藤は兄のと床を並べて、帯も解かずに小さく寝た。彼も程なく横になつたが、素より眠れはせぬので、頭を擡げて、呼ばれたかのやうに父の遺骸を視た。嘗て醫藥に親しんだ例のない父が、何故斯う脆く逝つたのか、二三時間前まではあゝ壯健でゐたのに、最早永遠に幽明界を隔てたと

は到底考へられない。昨夜以來聞いた言葉がはつきり記憶に上つて、今でも「喜久次く」と何か話してゐるやうに思へる。で、彼は幾度も首をあげて、差覗いたが、洋燈の火影に圓味なく仆れてゐる。聞えるものは、母や妹の啜泣さばかり。こんな深刻な悲哀には、曾て打たれた事がなかつた。

東が白むのを待兼ねて、喜久次は跳ね起きた。而して重な親戚へは電報、特殊の知人へは葉書で通知した。宗教上の事は母に異存がなかつたので、お藤に任して、彼は區役所へ行つたり葬儀屋へ掛合つたり、他所の軒看板に突當りながら歩いた。

四時頃に検視が済んだ。其の時検疫醫が遺傳があるから、大酒を慎めと喜久次に云つてゐた。隣の隠居婆が一人来てくれた丈で、母子三人がせすばならぬ湯灌は並み大抵でない。斯うした経験のない彼は母がいふまゝに眞裸になつて、覺

束ない手元で先づ父の鬚を剃つた。こんなに屍は冷たい硬いものかと驚きつゝ、父の蟬脱を洗ひ清めた。密と足に接吻をした。唇の色が變つた外は殆んど生きてゐる人のやう。彼は一寸書心を浮べて、瞬間に打消した。

『寫眞を撮つて置かうか。』

『あゝ、早う納めてください。善い往生しやはつた。』とお絹は脚の方を持つ。

それで喜久次は必死の勇を揮つて、十七八貫目もある亡軀を納棺した。母の頭髮の毛を三筋、妹は其の寫眞と新約全書、彼は父の褒めてゐた繪と煙草入を共に納めた。三人は棺に凭れて、最後の永別を惜んだ。涕で權七の死軀は濡れた。

七時頃から平岩醫師を首め刈屋夫婦や志賀と云ふ牧師等が見えて、柩の前で小やかな集會を開いてくれる事になつた。八疊一間の二階へ、橋本の兄妹、恪堂の書生、稻垣、柴崎、白子屋の手代、それから同郷の者で目下高輪に巡查をしてゐ

る男などか連つてくれた。平岩は先づ權七が生前多少キリストの福音に浴したの
は、畢竟死者の性格が神の御心に適ふたからで、實に麗しい最後であつたと、卒
直に話された。橋本は此處との交友を誇張的に述べ、郷里の男は生國での地位な
どを演説口調に語つて、聊か喜久次を寒からしめた。最後に志賀牧師は、死は人
生の學校に於ける卒業式である、後から見送者には悲しいが、立派に業を卒えて
行く本人に取つては誠に愉快な幸ひな事ではあるまいかと靜に辨じて、祈禱を捧
げられた。喜久次は何かと感激して「主のともとなりて」の讚美歌を涙の裡に聞い
た。

『餘り泣かすな。』とお絹が見兼ねて注意した。

けれどもお藤と二人で、ひた泣きに泣いた。

集會が了ると大抵は歸へられたが、平岩と橋本は暫く残つて、遺族に夫れとな

く傳道された。

「妾は佛さんのことも何にも解らぬのやさかえ、貴方々がお父さんの事を稱めておくれて、お難有うございます。」と未亡人が云ふ。

喜久次は「色々豫想外の御厚意を受けて、お禮に言葉がありませぬ」と呉々も謝辭を述べた。

近所が店を銷した頃葬儀屋から人足が來た。喜久次は郷里の男に來て貰つて、兩隣の數名に廣小路まで送られ、日暮里の火葬場へ佗しい送葬を營んだ。二日二晩殆んど一睡もしなかつた彼は、黎明方歸るが否や前後不覺に眠つて了つた。けれど喜久次は間もなく目醒めた。

「まア、喜久、もツと寝てゐなさい。それでは體が續かん！」と母が心配した。

「いや大丈夫だ。もう是れから一家を背負つて行かにやならぬのだから、何とも

ない。僕は亡兄の分とお父さんの分と、三人分働く。故國での葬式も耶蘇の牧師さんを頼まうぢやないか。」

「妾も今朝ひよツと然う思ふた。お父さんが喜んで行つてござつたのやさかえ、夫れが可いわいなア、なア、お藤。」

「さうだとほんとに私と……。」と血の氣の失せた顔を些と嬉しうにした。

こんな安排で、郷里での葬式も基督教式で營むやうに決めた。お藤は志賀牧師へ彦根の傳道師への紹介狀を貰ひに行つた。

今朝喜久次は日暮里から父の遺骨を拾つて來た。夕景には母と二人で郷里へ出立する豫定である。お藤は黒襦子の覆ひを縫ふて、骨箱に懸け、菊の花を供へた。而して三人が夫々亡兄の遺骨に接した時を連想して、一家の悲運を啣つた。お絹は兄の戦死以來災難續きだと嘆いたり、亡夫に妻の勤めが足らなかつたと涙に暮

れた。喜久次も不孝であつたと後悔して、是れからは出来る丈け謙遜な平和な人間になると云つたり、妹に留守中の心得を話したり、不幸は重つて来るやうだが、夫れだけ後には必然善からうと、慰め手の側に立つてゐた。

旅の用意をしてゐる内に、喜久次は島夫人から弔慰状を受取つた。今朝田口先生のお宅にて承はればといふ前置きで、クリスチャンの口癖のやうな文句を連ねて、不顧失禮お弔み申すと、懇に書いてある。親に逝かれた落目の彼は、昨今の衝突はなかつたかのやうに、父の臨終の模様を知らせ、書學校との關係は當分沙汰止みに願ひたいと書加へて、打解けた返事を忙しい中から早速出した。

四のー

新橋へ喜久次等を見送つた橋本は、歸途に一ツ橋通町へ立寄つた。お藤は今朝から隣の隠居に泊つて貰つて、火の消えたやうな淋しい留守をせにやならぬのである。殆んど茫然してゐるが、何くれ働いてはゐる。

「どうも難有う存じました。」と橋本に手を着いた。

「いえ、どうしまして。でもまア皆さん、御機嫌よくお發足なすつたから御安心なさい。嘸ぞ落膽なすつたでせう。」

「はア、どうも……。」

「何しろ突然でしたからね、そりや御道理ですよ。併し僕は、貴女方の確りして被居るには感心した。兎も角過去は顧みないで、前途に希望をお認めなさいよ、

人間の生命は希望にあるのだから。』

お藤は羞澁んで頷く。

傍に女學雜誌を見てゐた鈴江が、

『兄さん 私は十時頃までゐてよ。』と云ふ。

『だが、餘りお邪魔しちや可けないねえ。』と應揚にいつて、程なく橋本は歸宅した。

隣の隠居は眞鍮の煙管で刻煙草を美味さうに喫しながら、「善い往生をなすつた。女は罪が深いからあゝ、樂々は參れない。—— 今日々の娘さん達は昔者とは違つて、皆な學問がある」などと少時喋つてゐたが、反が合はぬと見えて、間もなく寢床へ入つた。

鈴江が歸つた後お藤は、店の戸締りや火の要領等に氣を付けて、其れから悄悄

横になつた。こんな悲しい目に遇つた事は曾て一度もない。洋燈の火影も押入の襖も何も彼も、悉く父の儼のやうに映る。昨日、一昨日、十日前、一月前、一年二年三年と先へく記憶を走せて、現在の悲哀を紛らさうとしては、様々の恩愛を思出て、矢張り枕を濡した。

一體彼女は母によりも、父に懐いてゐた。父も亦季子の一人娘で、彼女の可愛さには目がなかつた。喜久次の中等教育にすら反對したにも拘らず、彼女を京都の女學校へ入れて、月に一二度づゝは態々會に行つた。權七の骨董弄りは其の時分から盛んになつたので、東京へ來たのも彼女の上京熱が最も力を致した。お藤は今、嫂の實家にゐた當時を追懷して、何にも知らずに我儘ばかり云つてゐたと空怖しく思つた。其の頃近所の或る教會へ譯もなく行つたのが縁となり、鈴江等に親しくなつて、父が宗教に耳を傾けた道筋を考へ、其處に辛々一種の恩安を

認めた。

翌る朝目醒めると、隣の隠居は既に歸つてゐる。慌て、起きて見たら、ちやんと火鉢に火を入れて、鐵瓶に湯が沸かしてある。お藤はそはく隣へ禮に行つた。而して茶漬を申譯に喰つて、兄への來狀と新聞紙と火鉢を提げて、二階へ上つたが、何だか他所の宅へ來たやうな心地がする。今日は澄み渡つた秋日和で、丁度招魂祭の例祭の事とて、時々花火の音がし、表はどや／＼人通りがある。けれど彼女の周圍だけは恰も無人島のやうに淋しく、只間隙さへあらば熱い涙が頬に傳はつた。

『もう彼方へ着いた時分だらうか。』と彼女は火鉢に凭れて、沁々と故郷を偲んだ。昨夜と似寄つた悲哀に迫まられ餘り寂寥に堪へぬので、何がなと押入を開けて見た。すると本箱の上に色んな習作や草稿が、今度の取込みで山のやうに積んであ

る。お藤はゆくりなく披いて、おやく／＼と驚いた。中には彼女自身の影もあるが、大方はお下げの令嬢とマガレットのハイカラ風と、銀杏返しの優姿である。此のモデルは誰だらう？ 何處かで見たりやうだと不審がつて、新しい興味に暫く彼女は遊離した。春頃から素振が變だと、父や母が噂してゐたことがあるが、此の人なら餘程別嬪さんだわと飽かず眺めてゐると、不圖裏の格子の開く音がした。八百屋が知らず降りて見て、彼女は驚いた。橋本が角帽を手にして、きまり悪るげに立つてゐる。

『どうも失敬でした。表が締つてあつたもんだから。貴嬢お一人ですか……。』

ちやア又來ませう。いやどうも……。』と顔を紅めて歸りかける。

『どうぞ一寸お上り下さいまし、ほんとに汚穢い處ですけれど。』と彼女は云はざるを得なかつた。

『さうですか、では折角だから失敬します。』と二の返辭で、靴を脱いで二階へ通つた。

お藤は手早く座蒲團や火鉢を侷めて置いてお構ひなくと云はれるのを追れるやうに、茶の支度に降りた。

實は午飯も浮虚りしてゐた位なので、湯は冷めてあり、どきまぎ涼爐を煽ちながら「私一人を見込んで來らした心根が恐ろしい。時々變な風をななるので、耻しいやら嬉しいやら、男の心は知れぬので怖かつた。此の間青年會館へ連れ立つた時もあるに、此の上私の氣を揉ませなくても、可うさなもの、お、厭だ。御親切は難有いけれど……」と殆々當惑して了つた。

一廉の分別から隣の隠居に菓子を買つて來ておくれと頼みに行つて、彼女は辛

と茶道具を持つて上つたが、橋本は喜久次の書稿を見てゐた。

『御覽なされるやうなものぢやありませんでせう。』と力一杯である。

『いや中々結構です。』と侷められたお茶を啜りつゝ、

『お一人ではお淋しいでせう。僕もお母さんに別れた経験があるが、半年ほど経つたら忘れましてねえ、こんな時には、他へ心を轉ずるのが一等好いんですよ。何時迄もよくくしたつて、仕方がありませんやねえ。』と厭な眼色をする。

彼女は異性への感覺が亂れさうで、驚怖と恥羞に震懼えて、只器械的に黙頭いた。

『僕等と斯う親密になつたことを貴嬢はごう思ひますか、僕にはごうも偶然とは思へませんねえ。』と相手を昵々見入つて、

『お父さんにはあゝお熟交く願つてゐたし、妹は初中終お世話になつてるし、ご

う考へてもさうぢやありませんか。』

『色々どうも……』

『失敬な事尋ねますが、貴嬢は何ですか、ごつかへお約束でも……ねえ、藤子さん。』と云ひ、じり／＼膝を寄せる。

お藤はわな／＼、

『いゝえ、私は何にも存じ……』

『そんなら、僕の愛でも承けて下さるでせうねえ。』

『あの、一寸！』と急須を持つて起立るを、橋本はむづと抑へて、

『誤解なすつちや可けませんよ、藤子さん！僕は是れでも一生懸命なんです、昨年の春から熱烈にラブしてるんです！だから、僕の愛を……！！』と情熱に燃えた顔付で、腕く處女の手を容易に放さなかつた。

四の二

三日目に喜久次等は畑物の土産を澤山持たされて、追善もそこ／＼に早飛脚のやうに歸京したので、お藤はほつと重荷を卸した。其の時喜久次は、檀那寺の反對には困つたが、耶蘇教の式でやらなかつたら、斯う早くは歸れぬのだ、會葬者も宗旨に不服を唱へたが、お頭付きの酒振舞ひには皆な大喜び、中々盛んであつたと手輕に話してゐた。お藤は昨夜まで隣の隠居に泊つて貰つた事、鈴江が屢々来てくれた事、學校の同窓から弔慰狀が来た事、是だけ來狀があつて、誰彼が訪ねて見えた事、一昨夜今川小路に火事があつて怖かつた事など、橋本に係る一件の外は漏れなく語つた。喜久次が用達しに出た後で、彼女は旅の疲れで寝そびてゐる母から、色んな土産話を聽かされた。先づ國元で一同が吃驚してゐたことか

ら始まつて、

「……ほんでも本家の門前へ鴉が二羽落ちよつたやて。其れが汝、お父さんの死なはつた日ぢやで。お春も鴉啼からすなが惡かつたと云ふてゐやつたは。昔むかしから有る事ことぢやが、鴉は神様のお使者つかひやらうか。」と小さい眼をしよぼしよぼする。

かと思ふと、去年の秋村中を騒がした凱旋祝がいせんいひに、先代萩とお染久松の素人芝居があつた俳優の名まで聞いて來た。其の評判ひやうはんの請賣うけうりを他愛なく喋つて、夫れから在郷軍人團の最近の動靜に移つた。

「平吉さんは氣の毒な、此の間チビスで死なはつたやて、えらい怪我までして來てなア。ほいて八郎兵衛の兄は勳章まで貰らうといて、博奕打つて牢へ行つたやげな。彦太さんの後家は安樂寺の和尚さんと駈落してらるし、裏の助さんはなア、お高さんの籍で公事しらつたげなが、三之助のやうに養老金とか貰ふ腹でもほら

あかん。久藏は汝、季子やもん。何處の家にも碌な事はとんとないは。東京へ來たのが惡かつたのやけんど、どう諦めやうとまゝやほん。お父さんが汝、十年も中風で病は、つてみさへ、一年や半年は看病したかつたけど、あんな善い往生は滅多にないさかえに。」と復た涙含む。

お藤は編物の手を止めて、

「勝坊かつぼうは大きくなつて、？」

「うん、此方へ連れて來たかつたは。ほんでもなア、父親のない子は争へぬもんぢや。他所の子供と一緒に遊ぶより、可哀想に。お春も今度はえらい大儀ぢやつたぞや。賢い貞女ぢやて、稱めてくだはらぬ人はなかつた。あゝ若後家になりやると、何時考へても可哀想で仕様がな。彼の嫁はなア、生際が淋しいて、お父さんが云ふてござつたが、五月の時が見をさめぢやつたわいなア。」

「あの時、汝、停車場へ送つて来てやつたら、お父さんが悄悄と涙を溢さしたやて、蟲が知らしたのやら。お春は残惜がつて、到頭草津まで一緒に汽車に乗つて来たて、泣いてゐやつたは。何で妾等に秘してござつた知らんが、盡きぬ縁やなア、お藤。ほいてお父さんが、喜久次はあんな氣儘者やけん、お前さへ後家で通す氣なら、死水取つて欲しいて、親切に云は、つたげな。ほら然うやら。……妾、どうしやう？お父さんに末期の水を飲まさんだが、大事ないやらうか。」と貴重な遺失物でも思ひ出したやうに悲しむ。

「今更そんなこと……。」と彼女はほろりと白いものを膝に落した。レース絲のたまたが母の枕元へ轉げた。

「ほいて、まだ話があるさかえ、熱い湯を一抔ください。」

「え、。」と懶さうに云つて、お藤は湯を汲んで来た。

母は娘の動止を睜りながら、

「あのなア、お藤。汝は新助さんと心安かつたやら。あの人はなア、ごのみち汝を欲しいて、香奠までお春に事附けて下はつたは。しをらしいお志ぢや。」と力を入れて云ふ。

お藤は眉を顰めてぐつたり首垂れた。新助は、嫂の従兄弟で、幼時からお春の實家、野洲屋に見習奉公をしてゐた。で、彼女は在京中朝夕顔を見合せたが、別に愛憎を懐く年配でもなかつた。併し新助さんはふうさんにほのちやと時々店の者に調戲はれて、ぼつとした事はある。子のやうに可愛がつてくれる小母（お春の母）さんが、お春を遣つた代りにお前を甥の嫁に貰ふと屢々言ふので、お父さんに心配の餘り告げた事もある。圍碁と謡曲に餘念のない小父さんは、其れに年寄の愛嬌話し、氣は懸けまいぞやと云ひつゝ二人して、随分鍾愛してくれた。けれ

ど、嫂の一件で衝突してからは、野洲屋の記憶は葬らうと努めてゐた。此頃では殆んど忘れてゐるに、未だに何とか思つてゐるのか知らず、悲しい氣分で過去を追想する。母は長兄さへ存命なら素より其の積りでゐたので、一時不幸にも中絶したが、本人の強つての希望ゆゑ、お春が世話をしたがつてゐた。こんな良縁は又とないと云ふ。お藤は一圖に嫂の例の野心からと速断して、

『そんなお話は、葬式の時するもんぢやないわ。』と口惜しさうに呟いた。

『ほんぢやかて、汝、たまに會ふたのやもん。人の親切を無にする者は恩知らずぢや、仕合せの善かつた例しがない。——ほいて斯うなると、喜久の極りを早う着けんならぬし、汝も來年卒業したら、何處か世話のない處へ拾ふて貰はんらぬ。女は老けやすさいかえなア。』

『私は何時迄も宅にゐて、兄さんを助けやうと思ふのよ。』

『阿呆なこと云はんすな。鬼千疋の小姑が居たら。誰が嫁に來てくれ手があるもんか。女學校へ行くと、然うやさかえ。妾は嫌ひぢや。』

『まア可いから、暫くお寝みなさいよ。』とお藤は蒲團を一枚着せて置いて首をすくめて、階下へ降りた。

店へ來ると戸の隙間から明りが射して、瀧縞のやうに白くなつてゐる。ガラツと開けたかつたが、億却でもあつたので、彼女はぼんやり臺所へ坐つて、色んな物思ひに沈んだ。

「……………どうも嫂さんの所存が憎しい。母さんが人が善過ぎるもんだから丸め込んで、私を新助に押付けて、而して……………誰があんな無學な男の處へ嫁くもんか。兄さんだつて、子のある寡婦なんか厭なに極つてゐる。何處かへ後妻に嫁けば可い。—— あゝ橋本さん!? 誤解すなつてお歸りなすつたきり、……………厭

だく。何にも解ならい方が可い。どうなる事だらう？」と卒に人並みになつたやうな心地もして、取留もなく屈托してゐた。

五のー

喜久次は内職を罷めるか、見世を疊むの外なき羽目になつて、形紙屋の方を辭した。先方でも彼が餘り落着いてゐなかつたので、快く暇を出したが、三年間専門の教育を受けた結果は一年半ばかり僅の給料を得た位に止まつて、學生時代の空氣とは段々懸隔れて行く。彼は其の激變を不安に思ひつゝ、新しい境遇から起る興味と義務の觀念とで、一家を背負はねばならぬ壓迫に耐えた。行けば行くほど遠ざかる理想に懐れてゐるより、腐つても一戸の主人として飯事のやうな商賣ですら夫れで生活する氣樂さを覺えて、寧ろ商業に傾倒しやうかとも考へた。けれど素々擴張の餘地は乏しく、算盤上は殆んど家主への奉公である。と云つて新に企てる程の思量も經驗も資力も先づないし、縦し有つても實業だけでは満

足されさうもないから、矢張り初志を貫徹せにやならぬと云ふ意識から餘り逸れなかつた。

兎に角勉強の時間が乏しいので、喜久次は「小僧入用の札を吊したり周旋屋に申込んだり、知人に頼んだりしてゐた。すると或る日の事、病的に鼻の尖の赤い年増の女が懇懇に入つて来て、

『お宅様では小僧が御入用なですか、甚だ失禮なお尋ねでございますが。』おづ／＼と云ふ。

『欲しがつてますよ、まあお掛けなさい。』と彼は大に歓迎した。

年増は遠慮深く腰掛けて、敬語たツぶりですら／＼喋る。彼女には一人の忤があつて、此の春から去る商店へ奉公をさせて置いたが、番頭が厳しくて辛棒が成り兼ね、生來の内氣者は二度と再び行かぬと駄々る。夫はなし、寡婦が検束なく

育て、は我が子の爲めならず、何處か朋輩衆のないお見世をと心懸けてゐたとの由である。それで早速相談が纏つて、二三日後には左の頬の些と片大きい捨吉と云ふ小僧が來た。

喜久次は商品の符牒や日々の仕事を教へた。頗る鈍い代物であるが、居ないよりは優しである。お絹は後家の子だと何くれ慈愛んだ。

彼は多少の執筆讀書などの餘裕を得た。氣が付くと先頃からどうしたのか、美代子が時々意味ありげに表を通る。喜久次は思はされぬ譯に行かず、さりとして父が逝つてからは後構はずに手軽く動けない。どうしても島夫人から彼の言質だけは取返して、順序を経て進むべきは進みたいと思ふ。鶴子に許嫁があるのなら、何も美代子を離間せずとも可いではないか。あゝ云ふ行懸りで動揺したのだから、方向を轉じたのがそれほど悪くば、自分の情緒は勢ひ以前に立戻る。馬鹿にされ

たと怨恨を銜んで本意なく敵對はねばならぬ。而して美代子に振られに行つたら、夫れ見たことかと嗤ふであらう、ごうも島等に思はれたくはない。此の間の拒絶が自分の誠意を疑つての事なら猶更だと様々に悶えた。

或る日の夕方、美代子が買物を提げて通つた、喜久次は家を出て、かう窮屈に考へる必要が何處にあるものか、會つて話をする。話して思ひを訴へると勇氣を集めつゝ見え隠れに後追ふた。彼女が一寸佇んだので、四五尺の距離になつた。其の場に及んで、喜久次はごうする事も出来なかつた。

彼の心は自分でも丸で解らなかつた。動ともすると、風の鳴る夜半鶴子を思つてゐた。

五の二

染抜きの店幟、紅白の提灯、大景品福引付きの大賣出し、ブカ〜ドン〜の樂隊で、囃し立てる歳暮の空は夜も不夜城の觀を呈して、人は寒さに陥まらず押合ふ程通るが、喜久次の店には一向お蔭がない。唯々騒々しい目に遇つて、甚なからぬ費用を強制的に取られて、不景氣の上塗りだ。喜久次は勉學の妨害を非常に受けた。それでクリスマス晩は見世を半休みにして、妹と共に三崎町の教會へ出掛けた。橋本が他の人達と入口に立つてゐて、手を握らむばかりにお藤を階下の婦人席へ、喜久次を二階へと導いた。其の時彼は、妹の舉動を只ならず思つた。

段々人が集つて来て、可なり大きな會堂は一杯になつた。多くは界限の子女等なので、わい〜雑駁な空氣が堂に満ちてゐる。星形に切つた銀紙を講壇の後の壁に貼つて、クリスマスツリーには、色んな玩具を木の葉の見えぬ程ぶら下げて

置く。會衆一同の讚美歌が濟ひと、頭髮を綺麗に別けた男が五分間餘り下らぬ演説をしたが、夫れから幼い日曜學校の生徒が壇に登つて、歌を唱つたり暗誦をしたり無邪氣な遊戯を順次にやる。拍子喝采は大小霞の如く、喜久次も刈屋の雪子の時には手を叩いた。一寸西洋の小説を讀んでゐるやうな心地がして、屋外の寒さと歳暮の騒ぎを馬鹿にした、此の暖かい賑かな一角を愉快に感じた。

不圖彼は眞下の婦人席に、鶴子や美代子等の居るのに氣付いた。二人とも同じ小豆茶のお召の羽織で、頭髮まで共にマガレットである。お藤は鈴江と三脚おいて前にゐた。喜久次は探物を意外な處で見付けたやうに喜んで、夫れとなく彼等を見た。向ふでは既に此方を知つてゐたとみえて、美代子は餘程嫉妬の表情を湛へてゐる。目許に變な線が出来て、可惜美貌が傘の破れた菊の花、女の容色は斯うも變るものか、多分鶴子に對する情實からであらうが、萎れた花は醜とむない

と冷かに眺めた。其の代り鶴子の方は頗る得意の體である。蒼白い瓦斯の光りを受けても、ぼつと茜して可愛げに勝ち誇つてゐる。まさか他人を誘つて置いて、許嫁の男と巫山戯けてゐさうには思はれない。彼は殆んど彼女にのみ心を掣かれて、先度のは一寸感情の行違ひで、其の後文通をしてゐるから、あんな衝突はなかつたものと流したのだらう、もう動搖しないで變つた處からどこまで行かうと考へた。満更喜久次の自惚ばかりでないと思つて、鶴子は時々味な眼を放つて、無線電信を打つてゐた。こんな間にクリスマスマスの祝會は終つた。

歸宅後見世を閉めて、彼は其の日の勘定をしてゐると、お藤がそはく帳場へ来て、

『どうしませう？ 兄さん。こんなもの戴いたのよ。』と淡い地色の半襟を紙に包んだまゝ、心配さうに差出した。

臺所に愚圖ついてゐる小僧に早く寝ろツと叱つて置いて喜久次は、

「誰にかい。」と大方察してゐながら訊いた。

「橋本（鈴江）さんによ、クリスマスプレゼントだツて。だけどねえ、私の方からどうかしなくちやならないのに、餘り立派なもんだから、私、ほんとに困つて了ふの！」と眞紅になつて、體を揺る。

「ふん。」と彼は贈物に手も觸れないで、腕を拱いた。直覺的に色んな想像が湧いたが、自分の内心に比較べて言葉が出ない。

「どうしませう？」

「どうツて、十分に返禮したら可いさ。餘り氣にするやうぢや變だ。」

「そりや私は、何ともないことよ。」

「そんなら可い。」

「だから、仰有いよ。兄さん、私に丈け。」

「何をだい。もう彼方へ行け。」

「私、知つてるからさ、そんなに秘くさないで。」と同情に堪へぬ面持で兄を見た。

「いや、汝なんか僕に僕の腹の底が解つちや耐らぬ。それよりか汝は戀なンぞ斷じて爲なよ、詰らないから。」と力強く云つた。

五の三

今年の正月は瘦せても枯れても一家の主人だけに、喜久次は新しい意味と行事が多かつた。亡父のお下りの羽織袴で、家主や兩隣へ年玉を持つて行つた。小傳馬町の文具問屋から白子屋の方面へ廻つて、刈屋の宅は一寸名刺で失敬して、恪

堂先生の門を潜つた。盛装の薫が現はれて、

『どうぞお上り……』と面喰つて云ふ。

喜久次も挨拶に窮して

『……何れまた伺ひます。先生にどうか宜しく。』とばかりで辭した。

翌る日は初荷でも格別商用もないので彼は午後から鳥邸へ年始に出掛けた。洋館の玄関には「旅行中に付欠禮」と書いた紙札の下げた名刺受けがある。絹帽子の紳士が二人曳きか何かでガラ／＼出たり入つたり、名刺は堆くなつて、二三枚溢れてゐた。喜久次はあづ／＼例の奥へ伺つた。

夫人が褐色の紋付で見えたので、彼は昇降口で型の如き御慶を申上げた。若し上れと言はれたら、悠／＼遊ばして貰ふ豫想で来たのだが、其れは覺束ない表情が自分の腦裡へ映るのみで、言葉となつては現はれて來ない。

『ごうも失禮致しました。』

『おや、さうでございませうか、誠にお早々に……』と云はれて、頼みの綱は切れた。

喜久次は肩身を窄めて退出した。何分鶴子の事を考へてゐたら、訪問も文通も出來ない難局だから遣切れない。物質の壓迫はこんな猛烈なものだらう。一寸位は引留めてくれても、まさか貴夫人の品性を貶す譯ではあるまい。思ひおもつて年賀に來たのにと呟きつゝ、彼は寂漠に追はれて歩いた。江戸川端の怪しげなビーヤホールへ飛込んで、麥酒を自安に呷つて、其の元氣で柴崎の宅へ向ふた。

ぶら／＼佐土原の目的地へ來て見ると、國旗の翻つた戸口は鎖つて、各刺が散つたり葉書が介かつたりしてある。それでも一杯機嫌の彼はドン／＼戸を叩い

た。

「誰方？」と確に柴崎の聲である。

「僕だよ。」

「小池か！ 失敬するから、其處開けて上つてくれ。」と中から云ふ。

喜久次は名刺と葉書を捨て、ガタビシ入つて行つた。毎も構はぬ調子の柴崎は、はーアと欠伸をして、

「可い處へ来たもんだねえ。全く酔ちやつてさ、失敬した。」

「いや何有、さア、御年詞だ。」と手にして来た葉書を配達した。

「多謝！」とア窮屈袋を脱いで、寛ぎたまへ。だが今日はねえ、家内も女中も芝居に行つちやつたから、何の愛想も出来ないよ。」と角張つた顔を火鉢へ突込んで柴崎は紙巻蓑に火を付ける。

喜久次は袴の儘どツかり胡座をかいた。奥行の浅い名聞的な床の間には曉齋の鐘旭を掛けて、縁日ものゝ福壽草の鉢植と握り掌ほどの橙を載せた鏡餅を飾つて置く。弱い太陽が障子に當つて、ぼつと座敷は松の内のやうに明るい。お前達には己の外見舞ふ閑人はあるまいと云ふ風に、雀がチン／＼庭樹に啼いてゐた。柴崎が芝居の話をするので、喜久次は、

「何處かに「野崎」がかゝつてないかねえ、あれなら僕も觀に行きたいが。」

「面白けりや何だツて可いちやないか。」

「いゝや、僕のは或る目的があるのさ。」

「久松でも氣取るのかい、確り頼むせ。」

「うん、「野崎」を一つ描いて見やうと思つてる。」

「何だか浮世繪師みたいなこと云つてるな、義太夫なら方々で語つてるよ。」と柴木

崎は及び腰に新聞紙を引寄せて、寄席案内を読む。

少時娘義太夫の噂が出たが、喜久次は餘り興味がないので、可い加減に撥を合せてゐた。柴崎は「寒くなつた」と茶の間へ行つて、バタ／＼酒を暖めかけた。喜久次は火鉢の縁に頬杖を着いて、去年故國で暗示を受けて來た書題に就いて冥想する。半雙は自分が大津の聯隊から亡兄の遺骨を携へ歸つた時の印象を描いて、他へは其の對照に、凱旋祝の光景を現はす。肩で風切る歸郷の兵士が傲然とお染久松を觀劇する風俗畫である。非常に複雑な大物なので、兎や角構圖に惱むが、突如に屏風を一雙出したらどうだらう？、其の位の事をしなくては、到底自分の蟲は治らない。輕妙洒落を以て能事畢れりとしてゐる日本畫にも、こんなのが有ると驚嘆せしめずばならぬ。尤も近頃は頗る突飛な只新しがつたものが出ぬではないが、概して半可通な不徹底な作品であるとは云へ、自分も勿論不徹底で、殊

に自然界の色彩には眼が鈍い。だから當分は之れを先天的と後天的境遇の所爲にして置いて、力一杯試つて見る……など考へてゐた。柴崎は有合せを運んで、

「何にも無しだよ、使者がないから。」と一本燭けて來た。

双方に下地がある。

「もつと飲りたまへな。」

「難有う、僕は餘りいけないのだ。」

「而して沈むねえ。」

「全くだ、どうも此頃は不愉快で仕方がない。」

「其れは妻帯したまへ。さうせにや可かん。」

「何有、詰らぬツて。」

『そんな事はないさ。今日なんか情々女房の難有味を悟つたツけ。は、は、』と何か知ら面白さうに笑ひ轉げた。

日脚は既に傾いて、北風がいと寒げに吹いてゐる。隣の家から燥いだ女の聲が響いて来る。大分加留多でも取つてゐるのであらう。喜久次は暫く忘れてゐた戀の苦味を胸に浮べた。餘程酔ふてゐるのだが、或は其の加減か、内心の空虚に耐へ難ない氣がする。

『君、島様の娘さん、許嫁があるンか。』と紙巻蓑を喫しながら左あらず訊いた。柴崎は別に氣に止めないで、

『有るやうな無いやうな變挺なものさ。』

『ちやア矢張りあるンだねえ。』

『馬鹿に熱心だな、君は彼の人と交際してゐるンか。中々腕があるせ。』

『い、いや、唯一寸、雑談に聞いて見たのさ。』

『鶴子さんにねえ、許嫁が出来て、其れが又紛糾いた經緯があのお様の美術家を最負にしたり、教會へ行つたりする消息を語つてゐるンだよ。』と小説の梗概でも話すかのやうに、彼は喋々饒舌り出した。

其れを喜久次は内々大發見の喜悅で聽いてゐたが、柴崎の同僚が數名辭拂ふて來たので、談話は餘韻を残して幕になつた。

五の三

お絹は箸を放して喜久次を見ながら、

『汝はどうぢやね?』

『まあ可い。——飯を喰つたら、何處かへ遊びに行つてお出で。寄席か芝居へ。』

「けんども錢が要るがなア。」

「要るたツて正月だよ。今に僕がうんと儲けるから、氣を大きく持つてさ。」と云ひつゝ、蹠んで、妹に水を一杯請求した。

「お酒をあがつたの？」

「うん、柴崎の處で御馳走になつて來た。汝も一緒に行つて來い。」

「ほんぢや、汝もございなア。」

「僕は留守番しやう。小川亭なら近いし、義太夫だからお母さんに持つて來いだ。捨公と三人連で行つてお出で！」と勸めて置いて、彼は二階へ上つた。

机の上に年賀狀が多少來てある。中に嫂の封書があつたので、喜久次は披いて見て、ほつと溜息を吐いた。彼は平素殆んど彼女等を念頭に置いてゐないが、父の死後母は機があると春の噂をする。彼に嫂を娶合はせ、お藤を京都へ縁付け

たいのがお絹の宿望なので、兄の方は諦めてもせめて娘は嫁りたいと考へてゐる。喜久次は毫も疚しい事はないし、お藤の縁談も餘り聞いてゐないが、憐れな寡婦の優しい手紙は嫌惡の情が先立つほど色んなことを思はせた。

「何か云つて來たの？」とお藤が帯を締めながら背後から。

「花時分に來たいとさ。多分招んであるンだらう。」

「まア、仕様がな。斷つておやりよ。私もう、厭だから。」

「只まア放つて置くのさ。汝なんか非常に世話になつたぢやないか。」

「だつて嫂さんはねえ、そら何時迄も解らないのよ、お母さんがあれだから。私ねえ、何か言つたら、兄さんに仰有いつて逃げるわ。可くツて？」

「そら可いとも。だからこんな嘸はもう言ひツこなし。——早く行かないと込合ふよ。」と彼はお藤を追ひやつた。

喜久次は一人坊になつて、ぼか／＼暖かい炬燵へ入つた。酒の氣はあるし、誰か側におたると、何時になく放肆な思想で嫂を慕ふた。彼女なら十二分自分の意を迎へてくれるが、生涯を共にする意志が些とも起らないから仕方がない。本能の衝動から女でさへあらばと思ふ事さへあるけれど、其處へ陥らずに來たのが自分の身上だ。刹那の慾に動いて、悔いなき人も幸福に違ひなからうが、人生は見方で、自分は臆病だと何だか膺甲斐なく思つた。

而して柴崎に聽いて來た物語を思出た。言ふにも及ばぬが、喜悅を欲する爲めに苦痛があるのか、生きて行く爲めに不満あるのか、誰の身の上にも夫々苦情の付纏つたものだ。大切な長子を放蕩ゆる勘當して養嗣子を入れたら、其れが又女中と私通したので、紛糾を極めたのださうだ。それで鶴子に許嫁が有るやうで無いのだと判つて見れば、同情に堪えない話である。一體あの奥様は人生の温籍

に觸れてゐないから、あゝ頑固なのだらうと、彼は過去を忘却して、何となく親しみたくて堪らなかつた。幾ら衝突しても斯う思はされるのは、向ふでも多少思つてゐる證左ではあるまいかとも考へた。

畫學校の新年宴會の日、喜久次は島夫人に一寸行會つた。其の時夫人は彼に去られて、残念だといふ眼付をして別れて行つた。其の印象は確に彼に残つた。格堂先生が此の様子を見て取つて、

『小池、貴様は催眠術に懸つてる。感々してると駄目だぞ。』と彼の肩を叩いた。

『そんな事はありません。』と眞紅になつて云つた。

『いやそうだ。近頃は刈屋へも餘り寄付かぬさうだが、そんな魂の腐つた事で何になる？ 太い俗物だ。』

『まあそんなに仰有らないで下さい。私の魂はさうやす／＼腐りませんから。』

『ちやア可い。』と勝手にせよと言はぬばかりの苦い顔をした。

喜久次は無念に思つたが、戀の籬は師匠の壓迫も是非がなかつた。斯う情實に絡まれるのが不運で、目差す方へ進むより外はない。自分は島から美代子を斷念すべく忠告を受けた。而して鶴子が愛したくなつた。夫れに不徳義はなからう。飽迄屈せずやると覺悟を決めた。

反抗心に手傳はれた彼は、二晩掛つて、島夫人へ長い手紙を書いた。過日拒絶された時の落膽やら昨今の精神状態やらを仔細に述べて、貴女方に見棄てられては、絶望だと熱情を籠めて置いた。

此の手紙を出すには彼は頗る躊躇したが、而も其れが未だポストに在る時分から既に鶴子と婚約が成立つたかのやうな心地になつた。多少報はれさうなポシビリチーがある間は直ぐさう思へるので、頭腦が働く限り、勝手に來るべき幸福を

想像して見た。勿論世俗的には不釣合ひだが、苟も藝術を以て立つ青年である。假令彼に百萬の富があらうとも、自分は其等に超越して、勝利者の勝利者たらんとするものである。五十年百年後に於て、彼が地位は如何？ 且つ物質的にも一朝機運に際會したら、敢て卑下するに當らぬと、斯う自己を誇張しては、其の内容を充實せん爲めに勢一抔勉強した。而して本月末には參堂すると云つて置いた日を待ち侘びて、或る夜彼は小石川へ赴いた。

女中に刺を通じて佇んでゐると、ぼつと鶴子が硝子戸越しに覗いて引込んだ。

『只今奥様はお客様で被居いますが、何か御用でございますか。』と女中が來て云ふ。

『はア。』と彼は立竦んだ。

『甚だ失禮でございますが、……』と口籠つて、影の細い男の動止を睨々見

る。

暫く考へ込んだ喜久次は、

「何れまた伺ひませう、奥様によろしく。」と戸惑ひしたやうに外へ出た。其の時奥で、私語いてゐた誰かの聲が耳に着いた。

五の四

雪模様ゆきようの寒い宵よひである。空はみツちり暗い灰色はいいろに曇つて、星影ほしかげ一つ煌めいてない。此處へ来てはとうも冷たい感じかんじに打れる場合ばあひが多いが、喜久次は殆んど歸るにも歸られず、例の錢湯せんたうの處で茫然立停つた。淡い光線くわうせんが窓から流れて、ふアくと湯氣ゆけが蒸發じやうぱつしてゐる。中では鼻唄はなうたを歌つて、いなせに浴びてゐる者がある。無情な寒風さむかぜは凜々りんくと彼一人かれひとりに吹きつけた。彼は電信柱でんしんはしらに凭れて、ぐツたり懷手で苦悶

した。あんな緻密ちみつな手紙てがみを送つて置いたに、何か御用ごようとは餘り情けない。まア上れとか、今は差支さしつかへがあるから何時來いとか云つても可い筈、素々歡迎むかひされないで出來ぬ話だ。若し確な成算たしかせいさんがあるとか他の所用しよようなら、枉まげても上るし、随分ずいぶん跨またりも潜ひそれば、土下座どげざもつく。けれども此方こちらから投出なげだしたばかりで、何の抵當ていとうは取つて無いのだ。散々石臼さんさんいしうすを脊負せおほされて、駆かけすり廻まつて、揚句あげくの果はに一昨日おとひこ來いと云はれても仕方がない。あゝあ……と凍へたやうに佇たんでゐた。すると暗闇くらやみの裡うちから、

『あら!』と叫さけばれた。

喜久次はへナツと腰こしの抜ぬけさうなのを支へて、拳こぶしを握にぎり締めめた。

「まア、そんなに驚おどろかなくなつて可い事よ、幾ら私わたしだからって。」と物凄ものすごくおひかぶされて、彼は儘ままよと思つた。シヨールシヨールに包くるまつた女性ぢよせいは、

『竹や、もう可いから歸つておくれ、私は好い方に送つて戴くから。』と供の女中に云ふ。

是れには喜久次も僻易して、あたふた逃出すと、美代子は後追ふて、

『卑怯ねえ、貴方は！——鶴子だつたら可いのねえ、ねえ、さうでせう、おほ、ほ。』と勝誇つて笑つた。

假にも女學生風情の行爲でない、彼は下唇を咬んで、黙つて離れて歩いた。然し美代子は毛程も客忤れず羞澁せず、クリスマスの晩の彼女とは雲泥の差である。恰も邂逅つた親の敵を引張つて、竹矢來に乗込む底の氣色で、觀念せよと言はぬばかりに、

『何故さう苦い顔なさるの？ お人柄に係つてよ。……そらそうでせうとも、どうせ私は鬼婆だから。お氣の毒さま、おほ、ほ、ほ。でも私も日外もツと怒つ

たのよ、獅子か狼か、病犬のやうに跳付きなさんだもの。(聞く彼は一太刀さツと浴びた) けども、鶴子が夫れは喜んでるから、可いわねえ。小池さんのお爲めなら、生命を三十でも五十でも上げるツて、ほんとよ。第一實があつて、好男子で、お金持ちで、繪が能くお出来なすつて、ラハエルもミケラ……。』

『まアお待ちなさい！』と喜久次は餘りの事とて震へて遮つたが、彼女は中々屈しなう。

『でも貴方は、ほんとにお偉くツてよ。ほら、よくお宅の前を通つたでせう、誰れかが。滯して被居るんだもの、憎らしい。此頃なんか毎晩彼方へ邪魔しに行くの？ 夫れは先刻あんな面白い事たらなかつた。だから貴方、敵を打ちなさいよ。お偉い貴方、私は貴方の戀を妨げてるのだから。……貴方なんか些とも何ともない、唯憎い、口惜しいんだ。』と修羅を燃して涙合んだ。

喜久次は眼を逸して、

「幾らでもお憎しみなさい、僕は方々へ幹旋も頼んだが、曾て暴行を加へたから、其の責を受ける。謝罪の方法に窮して、つい斯うなつたので……」

「何故宅へゐらッしやらなかつたの？」

「手段がなかつたから……」

「嘘言おッしやい。」

「いや事實です。僕は貴嬢に焦れて、どんなに苦しんだかも知れぬ。けれども今茲で、貴嬢を絶対に愛するなどと云ふほど卑怯ではない。」

「而して鶴子と結婚するのねえ。」

「其れは別問題です。」と冷かに云つた。

「それで可いの!? お母さんにも云つたわ、見せつけるなんて。私は貴方が乞食

だッて恨むの!! え、口惜しいから。」

「幾らでも恨んで下さい。僕はこんな言ふ爲めには血を流した。幸福であるべきをすツかり失つた。併し貴嬢に意地があるやうに僕にも乞食の意気がある。だから……」

「ほんとに浮氣たらない。」

「さうです。始めて話合ふ貴嬢から浮氣だと言はれる程浮氣なんです。僕は河を渡らずに汀から引返して、横道へ逸れた。けれども變つた過去は仕方がない。それに貴嬢は僕なぞを彼れ是れいつて被居るお方ぢやない。もツと立派な淑女なんです。」

「え、ごうせさうよ。覚えてゐらッしやい!!」と叫ぶが否や踵を返して、彼女は碎かれたやうに暗闇に匿れた。

五の五

翌夕喜久次は、又も小日向臺町へ向ふの人であつた。昨夜あの機會に握手して置けば可いものを要らざる瘦我慢を張つて、瀬戸際で相手を逃がして了つた。其の癖辻俵を備つて、自妄で歸つた程落膽りした。過ぎ去つた事は何と云つても仕方がないが、彼は情々女連の拙さを嘆き、戀する性格ではないとも思つた。而して情の世界に何等の確信も満足もないので、理性を振立て、自分を投り出して考へた。今更美代子を執着するは愚痴だが、一方は懸命の哀訴中である。だから何とか解決を着けずば、徒らに誤解されて、可惜天與の感情を荒めて了ふ。既に餘程荒んだ。それで不如昨夜の逐一を有體に打開けて、任意の宣告を受けやう。餘り刺が多いので、殆んど戀には懲り果てた。こん

なに辛い、不見識なものとは知らなんだ。是れと云ふのも自分が未だ妻帯の時機でないのに、無暗と焦つたからだ。書中に妻ありだと云ふ結論に達してゐた。で、彼は途々面談の順序も組立て、若し彼等の不親切が明かに見えたら、美代子も鶴子も何方も棄て、了つて、理想的に足を洗はう。して又彼等に誠意があらば、三年及至五年の未來を約して、其の間に自分は素志の幾分を貫徹する。少くとも鶴子と略ぼ同等の程度まで進まにやならぬ。若し彼は富豪の娘に乗換へて成功したと云はれては、終生の名折れである、彼は意氣昂然として訪れた。昇降口の電燈をバチと明けて、昨夜の彼の女中が現はれて、「暫くお待ちを」とそはく行つた。五分間ほど経つたら「どうぞ此方へ」と云ひに來た。喜久次はがっかり萎れて、不安の波に打たれつゝ上つた。西洋館との間の廊下のやうな薄縁の敷いた板の間へ導くのである。是れは駄目だと直覺して、餘程歸

らうとしたが、女中が一人々々更つて、坐蒲團、火鉢、煎茶などを持って来るので、彼は是非なく齒を喫緊つてゐた。さりとて餘り輕薄だ、こんな淺墓な人だらう？ 此方の氣も知らないでと涙を滴した。

程なく見覺のある白鬚老爺がやつて来て、

『よくいらッしやつた。』と横柄に座を構へた。彼は精々沈着いて、

『飛んだお邪魔を致しましたが、奥様は………』と重い頭を下げた。

「はア、其の奥様の御委託で、此の儂がお會ひ申すのぢや。一體貴公は何用でござつたな。』

『其れは過日申上げて置きました。』

『それが何だか伺ひたいのぢや。』とつけく詰る。

喜久次は嚇と逆せたが、こんな小人物の對手になつて是の上猶も凌辱された

ら、自分の身も大事だと怖氣付いて、凝然口を噤んでゐた。

『そら言へまい。云へなくつて至當だ。貴公は紳士の邸宅へ押上つて、令嬢方を誘拐するのだらうが。近來さういふ墮落書生が多いんで、實以て御迷惑遊ばす。

若し奥様のお言葉がなかつたら、大に戒めてやりたいが、今晚の處は別に口を利くまいから。脚下の明るい内にさつさと歸りなさい。』と傲然立去らうとする。

『まア、待つて下さい！』と喜久次は涙を振つて、

『貴方は今、何と仰つた？ 墮落書生とは誰の謂ひです？ も、も、もう一度言つて御覽！』

『へん、大きな口を利きなさんな。何度でも云つてやる。抑も貴公は、最初當家へ何しにござつたな。』

『そんな答辨を貴方にする理由はな。』

「さうあらう、儂が言つて聽かさう。貴公は御親戚の令嬢を辱めて置いて、又候ふ、當家の嬢様を不義者にしやうとするのだ。近頃流行の色魔とか云ふものだ。」

「何有、色魔だ?!」と眉を逆立て、瞰付けた。

「幾ら目を剝いたツて、驚きやせんぞ。裸書生の分際で鶴子様をお貰ひ申したいとか何だとか、圖々しいにも程がある。儂は昔氣質だから、貴公如きは交番へ突出したい位だが、御主人の御不在中ではあり、旁々穩便に取計つてるのだ。口言葉叩かずと、早くお歸んなさ。」

「いや斷じて歸らぬ。さア、早く交番へ突出せツ。そんな其方が下劣な根性なら、此方にも所存がある。苟も男子たる者がかう云ふ恥辱を蒙つて、黙つて居られると思ふか。何處を指して色魔と云つた? 昔氣質も聞いて呆れる。」

『それほど廉恥心があるなら、潔く前非を悔いて、お歸りなさいと云ふに。悪い事はいやせぬ。』と聊か僻易の氣味で、飽まで嘲罵的に追拂はうとする。

喜久次は今宵ばかりは平然として居れない。最早腕力の外ないと激して、此ン畜生と、あはや拳固を飛ばさうとしたが、其の時禰の蔭から一寸老爺を呼んだ者がある。彼は喜久次を尻目に懸けて、あたふた出て行つた。

後で喜久次は熱涙を振つて、金火箸を一本ぐりと歪めた。何だ、自分等の事を棚に上げて失敬な。こんなに虐待する位なら、何故最初から門前拂ひを喰はさぬ? 幾ら虚勢を張つてゐても、自然の制裁といふものがあるぞ。昨夜の事件に何の非難がある? 實に正々堂々たる行爲だ。其れを邪惡に解して、罪人呼ばはりする彼奴等こそ曲者だ。何しろ當事者が茲へ出ろツと、狂ふが如く憤慨した。少時經つと、老爺は全く豹變して入つて來た。

『どうも早や、何とも申譯がありません。つい老人の一徹で甚だ過言でしたが、どうか不悪お含み下さい。』と猫撫で聲で云ふ。

『どう合むんですか。』と吐出すやうに答へた。

『まアそんなに云はないで、兎も角彼方へお出で下さい。奥様も甚だ失禮致されました。』と皺の深い額に青筋を立て、窮屈さうに宥める。

『ぢやア奥様は在宅ですなえ。』と呟いた。彼は對手のやうには急變されぬが、激怒は幾分和いだ。澁々下げた老爺の頭を上から抑へるか、下から上げるか、二つに一つが瞬間戦つた。

『いぬ、一寸、その何です、お差支があつて……。』と如何にも苦しい。

『暫くなら、僕はお待ちするのです。貴方のやうな方に會つて、こんな不愉快な事はない。』と矢張り語氣が荒くなる。今迄飲まずに置いた冷たい茶を、彼は呷

と一息に飲んだ。

老爺は古い頭を横に振つて、

『何だと?』と喜久次の歪めた金火箸で、忌々しうに灰を搔廻す。

『でもさうでせう。貴方は御老體に似合はぬ輕卒な方だ。假にも人に對つて、

僕はこの廉未な服装ですが——不義者だの色魔だのとよく言へたもんだ。要之貴方々の思想が……いや、其の誤解は多少融けたやうです。併しさう簡單に融ける位なら、何故あゝ斷言なすつた? 貴方は僕が今夜此處へ來た精神状態を些とも御存知ないんでせうが。それに……。』

『何をつべこべと、下手に出や可い氣になつて。』と復たもや鬘を脱いで了つた。

『でもさうでせう。』

『勝手にしろ、ちよこばな。』

「するとも！」と慨然と立上つて、彼は電燈の球で前額部を打つた。

五の六

喜久次は矢面で激してゐた丈に、後から一層甚く意氣沮喪した。無念やら口惜しいやら、餘りの事で齒が疼いた。失敗の連続した過去は殆んど追想するに耐えぬが、就中人の言葉に盲動して島夫人を信じ過ぎたこと、美代子を捨て、鶴子に移つたこと、さう變つた己が情操に對する疑問などが意識に上ると彼は手足に痙攣を覺えた。夜半私かに泣き悶えて、傲慢無禮な島に復讐の工夫さへ凝して見た。けれど其れをば實行する力は、所詮彼の所有ではない。一度頭腦が冷えると失意の反省に傾いて、喜久次は自己の弱點を十分知つてゐた。で、彼は積極的に憤を晴らさう、生涯の目的だに達したら、自尊心の負傷も癒えて、彼等を見返す

時機もあらうと、勢ひ藝術に没頭せざるを得なかつた。

茲に彼の倒されても倒れぬ生命がある。一寸筆を執りさへすれば、下手なりにも繪に成つて来る。しつくり自分の片影が彩られると、涙の種は喜びの對象に化して了ふ。抑も此の不如意が藝術の親で、安心立命の産婆かと思へば、島等の影は餘程調子が變つて来る。若し自分が之れをば巧に利用し得たら、彼等は或ひは尊い刺激を興へてくれた恩人かも知ぬ。さうならば由ない怨恨に血を潤すよりは矢張り此の破れた戀も復活させたいと、懲すまに慕ふ時もあった。

何しろ色んな苦闘から屏風の腹案は大いに抄取つたので、四月からお藤に見世番を手傳はして、どこか静かな處へ遁がれて、専心揮毫に掛る積りである。店の帳場で讀書をしたり妹と机を共同にしたり、鼻先に雪隠を控へた臺所へ坐つたりするやうでは仕方がない。それで彼は何かと金の必要を感じて、失戀の辛さの外

に色消しの心配をも懐いてゐた。

喜久次は以前刈屋から勧められて、教會へも行き聖書も讀んだが、其の頃は左程興味がなかつた。併し近頃美術との關係を考へて、時々宗教書を読む。而して力強い切實な教訓に觸れて、夫れ相應な受感性の潜んであるのに聊か驚いた。人間には時間と空間を超越した普遍性のある爲めか、自分等の受けた教育が基督教から脱出た分子を加味してゐるためかとも考へた。兎に角亡父の命日には、志賀牧師を招待して、家族と共に基督教の話聞いた。

或る雪の降る寒い夜、牧師は近所へ來たとて立寄つた。今宵は餘り宗教談をしないので、「時に」と居住ひ直した。お藤の縁談に就いての事である。

喜久次は妙に胸が騒いだ。

「實は一寸お尋ねしてくれといふ熱心な志望者があるンでねえ、甚だ突然でした

が。」

「いゝえ、そりや何ですが、あんな女は駄目でせう。」

「どうしまして、一應お考へなすつてくれませんか。」

「一體誰方からの話ナンでせう？」

「實は、その橋本君なんです。」と牧師は複雑な表情の顔付で云つた。

お藤が途中で引返したので、お絹が代つて茶道具を持つて來た。喜久次は、お母さんも聽いて下さいと云つて、牧師がすらく語る申込みを聞いた。是れが所謂媒介者口か、成程此の調子で吹込まましたら、纏らぬ縁談でも纏るだらう。自分のは之れがなかつたから、死に優る恥辱を受けた。して見ると刈屋等は……と色んな連想を起して、首垂れてゐると、お絹が側へ寄つて、

「兄 汝は何で黙つてゐるやいなア、こんな結構な縁談はなア、迎も宅の甲斐性

に合はぬさかえ、早う断つて下さい。」と大きな聲で囁く。

『併し折角の何だから、篤とお藤の意向も質いて見て、そして……』

『いんや、彼の娘にやんだ何にも云はいても可い。』と何時になく差出る。

喜久次は仕方なしに頭を掻いた。牧師は失望の色を現はしてゐる。

『はい、先生様』と彼女は手を着いて、

『其のお志は千倍に受けますぞなア。けんども、宅の彼の娘は逆もえらいお方の嫁さんには成れませんのどす。お父さんが甘う育てやはつたさかぬに、兄とは違ふてほんまに苦勞知らず、どうして他所の辛捧が出来ませうかいなア、はい。妾等も若い時、殿い姑さんに懸つて、二三年は泣きました。死んだ兄の時には乳が出ませなんだぞなア。ほんでに妾は、慾に限はないさかえ、どんな處でも世話の要らぬとこへ遣りたいと思ふてますのどす。幸ひ京都の親類續きになア、好い

口がありますのや、はい、どうぞ何ぞす、此の縁談は……』と眼をしよぼくさせて、一生懸命で断つた。

牧師は多少答辨を試みたが、到底見込がないと思つたのか、其の場を程よく切上げて、興醒め顔に立上つた。喜久次は店先へ送り出て、

『……あゝ云ふ事情ですから、どうぞ不悪……』と來客の帽子を渡した。

『いや。御隠居様のお話も一應は御道理ですから、若し近い内に何とか申すやうな事がなかつたら、どうか是れきりにして下さる。』

『承知致しました。どうか橋本さんに宜しく……』

『而して、藤子さんには是非秘密に願ひたいですな、餘計な波瀾を起しちや可けませんから。』と靴の踵を鳴らしつゝ、念を押した。

『無論さう致します。結婚問題は厭ですなえ。』

「是れが世の中ですよ、貴方のも時機が迫つてゐる。——左様なら。」と牧師は雪の霏々降る表の人通りへ紛れた。

二階へ来て見ると、様子を窺聞いてゐたお藤が泣きの涙で徐々悶着を起してゐた。彼女の訴へる點は、假令断るにしてもあんなに言はれては、二度と再び顔が會はされぬ。而して何處へも嫁かず家に居ると駄々るので、喜久次は或る程度まで妹の味方をした。すると母は、皆なお藤の爲めを思ふてゐるに、若い者が一本になつて、一代通して來た舊弊の親を虐める。こんな不孝な子供等では味氣ない故、死んで了ふと自妄になる。此方へも敵對はれず、喜久次は殆々調停に困つて、縁談は未だ早いの一點張りでごまかした。自分に其の邊から來た痛恨があるので、何だか魔物に觸るやうで怖くもあり。父や兄が在世ならと今更に故人を惜んだ。

喜久次は屢々母から、間違ひのない内早く取極めよと逼られた。無論京都へであるが、其の方面には複雑な情實が纏綿してあるので、彼は若し橋本が眞面目に望んでゐるのなら、母の主張は兎も角遣るべきなら其方へ嫁りたつた。けれども其の後牧師から何の音沙汰もなく、鈴江等も姿を見せぬやうになつた。而してお藤の舉動が時々變なやうに、好からぬ風聞を耳にするやうで、氣の揉める事のみ多かつた。お絹はさなきだに心配して、「何で親のいふ事を肯かぬのぢや。獨身の汝に嫁入の話は言ひ悪いで、十分控へてゐたが、もう斯うなると一日も捨てては措けぬ。女は一寸違つても疵物になるさかえ、早う決めて、汝のも早う娶へ。汝はごうするのやら解らんで黙つてゐるけれど、お春のことは今更何にも案ぜいで可い。お父さんも、喜久の厭がるのは當然ぢや、無理には勧めぬと言ふてござつたのやで、妾はもう前から諦めてゐるは。其の代りお藤は新助さんに娶ふて貰へ。」

若し氣づつない處や世話の多いところへ遣つて見よ。行く主も汝も一代骨が折れる。お藤が世間見ずに一寸位首振つても、汝さへ承知なら夫れで済む。他の事は何でも辛捧してる妾の願ひぢやほごに、斯の言分だけは通してくれ。子を思ふ親の因果ぢや」と云ふ意味の言葉を、喜久次が否み様のない處まで内々熱心に繰返した。で、彼も其の氣になつて、京都の嫂へ、都合で花咲く頃上京あれ、妹の縁談に就いて相談もしたいと書き送つた。

六の一

自然は冬の衣を脱いで、長閑な春の姿になつた。お絹は今日か明日かと、お春や孫の上京を期つた。一日喜久次は松戸へ行つて、江戸川堤の草原で、煉瓦工場や渡し場の景や、ゆるやかに川を下る帆船や、田畑を隔てた鎮守の森など、麗かな春の日を寫生して、夕方前に歸つて來た。するとお藤が待ち伏せてゐたかのやうに出て來て、

『兄さん、一寸!』と小聲で云ひつゝつかは下駄を穿く。

『一體どうしたんか。』

『まア此方へいらッしやい。私………もう、ほんとに、私。』

『來たんだな。』

『え、新助もよ、だから。』とさも不平さうに兄を連れ出した。

喜久次は多少驚いたが、戀人か何かに撮まつたのと違つて、平氣な顔付で歩いた。お藤は涙含んで、欺かれた、口惜しいと恨みの數々を荐りに述べる。

『仕方がないさ。』

『だつて、人を騙すんだもの、兄さんは酷いわ。承知しないから可い。』

『ちや、どうするんだ？ 僕の腹はちやんと決つてるよ。』と半ば茶化して、彼は竹橋の濠端へ出た。

お藤は眼を釣上げたり睨めたり、八の字を寄せたり首垂れたり、色んな表情をして、若緑の柳影に踞んだ。喜久次が今日一日見て来た柔かな太陽は、近衛聯隊の營所に向ふへ落ちて、のんごりした空は、藍青、橙黄、深紅、岱緒などを介意はず撒き散したやうに映えてある。ゆらりくと柳の糸が流れて、お藤の背中

へ觸れる。後髪のはつれた白い袴頭に一枝さつと、彼女の肩を縮ませた。彼は其の姿に畫趣を覺えて、凝然視てゐると、モデルはトボン／＼小石を濠へ投げて、溜水に弱々しい波紋を作る。

『おイ、さう手を動かすなよ、一寸成つてる。』

『知らないツ。』と立上りさま歩き出した。で、彼も眞顔になつて續いたが、妹を説伏す文句を考へるよりも、自分を詩の境地に置きたかつた。

『ちやア兄さんは、お母さんの云ふやうにするのねえ。何處の宅だつて、嫁と姑は仲の悪いモンでせう。それにあれだもの、其の理由知つて、？ねえ、知つてるでせう、兄上は馬鹿よ。』

『馬鹿でも可いぢやないか。それより、汝は下らない虚榮心を棄て、了へ。』

『虚榮心ツてないわ、私なんか。』

『いやあるのだ。あつても可いが、餘り小さいから可けなう。』

『ほんとに、宅の者には横着で仕様がなう。』

『誰が汝なにかに遠慮するもんか。併し悪くは計らない。汝は人の氣も知らないで、沸々嘆してるが、僕が京都へあゝ云つてやるまでには、そりや随分考へたんだよ。毎日鬱いでるから病みはせぬかと案ぜたし、お父さんは居ず、母はあれだから問題が起つちや困つて了ふ。………そら僕だつて、唯つた一人の同胞だもの、幾乎知名の人物とか有望な人間の處へ遣りたいとは思つたさ。けれども汝はさう振つた女ぢやない。只一寸醜くない位のものだから、矢張り母のいふやうにした方が善いんだよ。僕は情々さう思ふ。畢竟汝の新助を嫌つてるのは、彼が異彩の放たない商人だからだらう。』

『いんや。』と國訛で急ぎこんで、

『私は兄さんの爲め………。』

『僕の事は可いから、まア聴け。其れが女の偽善といふものだ、實に淺慕な根性だよ。怒か門構の家へ嫁つて、小さく成つてるよりは、舅も小舅も何にもない氣樂な處で、ドシドシ亭主を尻に敷いたら可いぢやないか。幾ら汝、肩書があらうが虚名があらうが、高利貸に苛まれたり質屋へ走つたりするやうぢや、全く悲慘だぜ。それよりか、良人を忠實に助けてな、家業の發達を計れ。其處で即ち虚榮心を満たすんだ。美化して満足するんだよ。其れが………。』

『皆な獨斷で、私の心は些とも解らない。あゝ、どうしやう?』と手巾を眼に宛てる。

『どうもないさ。愛の對象はねえ、毛嫌ひ位で左右しないが可いよ。女は一時の感情と機會で、生命の安賣をする。そんな事より家庭の壓迫に負けの方が優しぢ

やないか。』

『ぢやア兄さんは愛のない者でも愛する事が能きて？』

『そんな餘計な口實は止せツたら、女は受動的だ。』

『勝手な理屈ばかり、さう單純には行かないわ。』

『まアさう心配せな。何にもまだ決つてないのだから、大丈夫だよ。』と一寸慰めて置いて、彼は一足先きに歸つた。

喜久次は四五年振りに新助に面會して、案外好い印象を受けた。きツくり色の黒い肥つた體格で、可成り確りした男である。尤も學生上りの女には不向きな純粹な商人肌であるが、毎日呉服の行商に行つて、婦人の相手にばかり成つてる人物とは思へない。大きな耳朶に黒子が一つ見えた。無地鐵の羽織を着て、端然畏座つて、ハイ／＼ハイ／＼とやられたには、聊か彼も閉口した。以前お春の手

紙で開いて置いたやうな事を、遠廻しに如才なく饒舌る。近日丸太町へ一戸を構へるさうで、此の間から悉皆屋を始めたが、是れで新しい得意を作る積り。横濱には多少手蔓があるので、明日から行つて運動する。此地にも御用があつたら、どうぞお知らせをと云ふ。

『僕は交際が極く狭いが、東京の悉皆なンか駄目だから、氣を付けてますよ。』

『お難有うございます。そして又、色々新柄の注文がありますさかえ、どうぞお工夫を願ひます。何でも新流行の魁が第一です。』

『いやはや、僕等の圖案は京都に敵はぬさ。』

『どう致しまして、先前から色々拜見さして戴きました、えらい結構です。』

『そんなものがあつたかね、そりや大變です。』と笑つて、
『時に野洲屋の景氣は近來どうですか。』と話を變へた。

『相變らず中々御繁昌でございます。お蔭様で私共まで……。さうく、音
 さんが宜敷と申しました。』と獨り黙頭いて、銀煙管で一服吸ふ。

『あ、音松（彼の從兄弟）か！ 彼奴も大きくなつたでせうな。』と彼は非常に合
 蓄のある暗示を得た。

『へい、もう今年からは一の手代でございます。常時太一（喜久次の亡兄）さ
 んがお出でやした時分は、私も彼の人もほんの丁稚としたが、早いもんどすな
 ア。』

『さうですなえ。』と彼は嘆息した。

其處へ先刻からもう全然家の者のやうに食事の支度を手傳つてゐたお春が、

『えらい遅りました。』と襷を外して、膳を運んで來た。

新助はさも氣の毒さうに

『もうどうぞお構ひなく……。私は宿へ行かうと思ふて、ついお話が何
 ぞしたさかえ。』ともぢくする。

『何にもなしごすえ、新さん。』と云ひつゝ二人に侷める。

『どうも恐縮だな、お客様に給仕さしちや。』

『滅相な！』と彼女は濕んだ目色で、意味ありげに喜久次を見た。

『貴女も一緒にどうです。勝坊はどうしてますか。』

『今、お店でふうさんに遊んで貰ふとりますが、……。』

『其の位ならまあ可い。』

『ぬらいお骨折りどしたわ。なア、新さん。』

『さうですとも。』と彼は紅くなつて、

『私もこんなに味好う何やとは思ふてませなんだ。先前から小母さんに色々伺つ

て、ほんまに……。」と頭を掻きく喜ぶ。

喜久次は餘り母が喋つて置かねば可いと思ひつゝ、

『まア兎も角召上れ。何にも有りませんが。』と先づ箸を執つた。

六の二

新助は莞爾顔で十時頃、駿河臺の宿屋へ行つた。店を仕舞ふて喜久次は帳場にゐると、お春が勝之助を連れて來た。

『さア、叔父さんに左様ならお爲やす。』と叩頭をさせる。

『瘦さん、そんな事さすにや及ばん。』と遮つたが、勝坊は眠むさうな顔付で、

『左様なら。』と小さい手を着いた。

其の可憐さに彼は眼を瞬して、

『お、賢い。』。今日から勝坊は宅の子になつたのだから、もうそんなお叩頭な
ンかしないで、氣儘放樂に大きく成つてくれ！』と手平程の頭を撫でた。

お春もつい萎れて、何か云ひたげなのを、

『何れまた明日、お先き御免やす。』と二階へ行つた。

後で喜久次は情々甥の身の上を考へた。彼は三才何ヶ月の五つで、父親が満
州の荒野へ向ふてから生れたのである。幾乎自分等の反映はあるが、あんな陰鬱
な纖弱い事で成長するだらうかと思ふと、底知れぬ重荷が彌が上に殖ゐる。世人
に對する場合は丸で違つた氣持がして、叔父さんなどと言はれると、自分の青
年期を殺されるやうに感じた。

晝から體の置所に困つてゐたお藤は、來客の都合上見世の間へ寢床を敷いて、
不精無性横になつた。喜久次も程なく洋燈を吹消して、餘り心地の好くない床に

入つた。表の人通りも大分減つて、ガラ／＼と走る俵の音か、按摩の笛くらゐが聞ゆるばかり、二階で母と密々喋舌つてゐたお春等も寝静まつた。

喜久次は二三尺向ふで溜息をついたり寝返りを打つたりしてゐる妹の縁談に就いて、口とは反對に親切に考へた。あゝ高壓的に虐めたものゝ、幸ひ新助が来たのなら、十分彼の人物を鑒みて、實は色々條件を持出す積りであつた。けれど母がごん底まで話して置いたので、お春とも相談の餘地がなかつた。とは云へ、厭がるのを無理に押付けては、可哀想でもあり行末が案せられる。未だ年齢も若いから、當分は延ばさう。自分なら假令毛嫌ひでも他人から強いられたら、反抗するに違ひない。時機の来る迄俟つた方が怪我無しだと思つた。して又、先刻新助の話に暗示を得た家の過去を追憶すると、どうも是れが運命のやうに思はされた。

何時誰に聞いたともなく、自然に脳裡へ入つた古い物語である。亡父は維新の際扶持に放れて、廿歳の年母親と二人で分家をした。(若し親を棄て、都會へ出て置いたら、随分出世をしたらうにと、屢々言ひ聞かされた) 水呑み百姓の傍冬春、煙草刻りをして、仲仙道をギシ／＼と京都へ賣りに往つた。其の都度守山の飲食店で中食をしたが、其の隣の大きな百姓家に小意氣な娘のゐたのに眼が留つた。其の間には大方木訥な詩話もあつたらうが、何でも飲食店の爺の根氣に任した肝煎で、辛々四五年目に盃をさせたのださうである。

其の後守山の親戚は年々家運が傾いて、子供の時分よく瘦せこけた伯父が金を借りに来たのを臆えてゐる。今では親類交際も絶々の逼塞だが、其の伯父の末子音松が、野洲屋へ奉公に出てゐた。其れを亡兄が天津の聯隊へ入營中、京都へ行つた序に訪れて、そこで京美人のお春を垣間見たので、何しろ三年近くも日曜日

毎に缺かさず足を運んだのだから堪らない。到頭凱歌を奏して、お春様々と崇めて置いた。

夫れや是れやの因縁から、今度また妹を彼地へ嫁らねばならぬやうになつた。ごうも自分等の血管内には上に向つて、戀を續ける遺傳があるのか知らと、喜久次は見込のない鶴子に執着の去らぬ氣分に解釋を得たやうに思つた。併し自分の側は同情者が無いし、最初の出立が悪いから駄目だらう。自分が斯う考へ出せば持ち切れぬほど辛いのに、人の心配で頭痛がするやうでは遺切れないと、蒲團の裡から両手を出して、大きな欠をした。するとお藤は、

『兄さん！』と虫のやうな聲で呼んだ。

『汝、未だ眠てないのか。』

『え、私が犠牲になつたら、家は幸福になると思つて？』

『汝を犠牲にして!? 申談ぢやない。』

『そんなら私は可いのよ。』

『いや、さう云ふ汝の料簡なら今の内に断つて了はう。僕は唯是れが運命だらうと思つて勧めたのさ、人間は運命に打克てないからねえ。』

『運命ッて、私には解らないもの。』

『だが、クリスチャンの所謂神の攝理だと思つたらどうか。新助が永らく汝を望んでゐたから、神が求むる者に與へ給ふッてな譯で、從順に嫁つたが善いよ。』

『ちやア兄さんは、兄上を望んでる人に與へられますか。』

『そりや話しが違ふよ。』

『だから……』とお藤は悲しさに云つた。

眞暗で互の顔色は判らなかつた。

六の三

神武天皇祭の日は、晴やかな佳い天気であつた。喜久次は嫂を何處かへ案内すべく母から言付かつた。お藤が鼻を塞らせたので、彼は餘儀なくスーポー式で正午過ぎから出掛けた。上野へ徒歩で行く積りである。

お茶の水の通りへ来て彼は、

『以前ゐた家は此處ですぜ。』と今は菓子屋になつてゐる書畫屋時代の家を指さした。

『まア、さうとすか!』とお春は一寸立止つて、懐かしさうに見た。

彼女は今日勝之助を預けて來たので、餘程若やいで見える。癖の可い頭髪を現代風に結ふて、肌理の細い矢張り綺麗な顔には女の嗜みを薄すり、憎いほど佳い

輪廓の頬には片笑鬢を浮べてゐる。併し極めて可愛らしかつた目元の肉は稍落ちて、往々魂の抜けたやうな淋しい表情をする。是れがお春の難で、喜久次は其れに接すると毎も眼を逸らして了ふ。何しろ半襟の映りは好く縞お召に、すらりと茶鼠の羽織を着て、八ッ口へは友禪の嬋妍さを仄かせ、縞のある蝙蝠傘に手巾を持添へて、優しい舉動振りで後れ勝ち。喜久次は故意と繪具で汚れた小倉袴を穿いてゐる。

湯島邊りには、ちよいと桃や白木蘭が咲いてゐた。題材には不適當だが、木蘭のおツとした花は甚く喜久次の興味を惹いた。シガリの煙を吐きながら、

『春の花では此れが一等感じが可い。何處からあゝ云ふ色が出るんだらう?』

『さうどんすえナ。』

『赤いのはどうも執拗へてねえ、軽い色に限るッて……。』

「ね、さうく。」とお春は取付き得たやうに、

「義兄のお好きな梨の花がもう咲いてますやろ。李の花やら。」と微笑んで云ふ。喜久次は遠い故郷の繪を浮かべた。

「妾は矢張り田舎が好きですえ。此頃はほんまに晴々するぢやおませんかいナ。紫雲英や菜種の花盛り、野良で辨當を使ふてからに、萱やら蒲公英やら土筆やらか、前垂れに一抔でも二抔でもあるのぞすもの。雲雀が啼いてますし、ナ、さうぞすやろ。」

「嫂さんは中々詩人だねえ。」

「あの、まア。」と彼女はさつと紅くなつた。

「昨夜も一昨日の晩も、僕は嫂さんの戀路を考へたツけが、何だか宛然小説のやうだ。亡兄がどんな顔して通つてたか、見たかつたねえ。」

「何やらじやらく……。」

「でも日曜日を待兼ねて、千里か一里で往つたんでせう、嫂さんはどんなに應答つてやつたかねえ。多分男の氣も知らないで、澄してゐたんだらう、可愛想に。顔も拜めず歸る時な……。」

「何を云ふてやすの、阿呆らしい。」と口では云つたが、例の淋しい表情をした。

上野の山は清水堂邊りの早櫻が綻び初めて、振下げ髪乙女の姿である。夫々装ひを凝らした人々が思ひくく、時々ドツと旋風が吹いて、行燈袴以外御婦人へは急遽脚下の警戒を要求する。喜久次は黙つて、嫂の心事を忖度しながら歩いた。妹の縁談で彼女の志望の一端を満たしたから、トントン拍子に飛込まれては困るが、まさかそんな心配はあるまい。謙遜な分別のある、慎しやかな女である。それに女は相手の意中を探つて、可けぬと見たら何物を犠牲にして

も自己の弱點は現はさないさうだ。餘計な杞憂は此方がどうかしてると、私かに考へた。

「妾も田舎が厭になりましたわ、美しいお方がたんとお居やすさかえ。」と石段を登つた時彼女は云つた。

「そんな理由なら、僕は京都へ行くねえ。」

「まあおいしい事を、誰方のお仕込みですか。もうく隅にや置けませんえ。」

「處が一向下されませんって。」と彼に際疾く受けて、お春を櫻ヶ岡の展覽會場へ導いた。

昨今開場したばかりで、未だ十分整頓してないが、美術協會派の大家の作品が五六點はある。偉いと思へば皆偉いし、見方に依つてはさのみでない。斯う諸家の大作が容易く覽られる丈けに、自づと自分等の思想は平面に流れて、鑑賞家で

ない者には堂奥に達せんす障害になる。掲げられたものも過半は纖巧の二字に盡きて、氣韻縹紗たる立體的繪畫は殆んどない。修養時代に便宜の多いのは善不善だ。彌々募る現代の病源は、需用に對する粗悪なる供給の超過であると、喜久次考へつゝ一渡り目を通した。先づ驚かされるのは元祿摸樣を綺麗に塗つた、浮世繪式の美人畫の多い事で、随分顔の線などに苦心はしてあるが、徹底した作品は一向見當らない。而して光琳一派を慕ふた痕跡と、洋畫の臭味とが方々に溢れてゐる。彼は自分に秀れた技能のない事や、然も他と着眼點の異つたことなど思廻らして、本館の方へ來た。

すると庭前の喫茶店に腰掛けてゐた彼の同窓が見付けて、小池々々と呼ばはつた。彼はお春を待たせて置いて、悪びれず出て行つた。

「君はもう白子屋を罷しツたてな。」と其の内の一人眞面目に云ふ。

『あ、昨年の秋……。』

『では何故我が黨へ知らさんのだ。まア是れを見る。』と羊羹色の制服を拂いた。『つい機會がなかつたから。』

『其れが主義者の癖だよ、孤立して何になる？』

『まア可いさ。だが、小池、あれや君のワイフだらう。』と乙が囁く。

『うゝん、兄貴のワイフさ。』

『兄貴は戦死したぢやないか。』

『戦死したツて、ワイフは生きてらア。』

『宜敷やつてやがる。だから此奴、近頃些とも寄付かん。』と羊羹色が呟いた。

『あゝ、あ、圖按科なソぞ悲惨さねえ。』と陰鬱な丙が伸をした。

あ春は是等の動止を見ぬ振りで見成つて、例の淋しい表情を現らしてゐた。や

がて喜久次が来たので、

『妾がゐたさかえ、お困りでしたやらうナ。』と手巾を密と眼に當てた。

『何有、そんな事が……。』と元氣に云つて、彼は程なく展覽會場を出た。

さて何處へ行かうかと咄嗟の思案で彼は樂隊で囃立てたパノラマ館へ入つた。

お春は「あ、こは」と云ひつゝ、彼の袖に縋つて、曲迂つた危かない階段を辿つた。

少時は光線の急變で漠然としたが、人顔の分明ならぬ土窖のやうな處に観客は群つてゐる。灰色の闇鬱たる戦場の光景は、次第に喜久次等の眼前に展けて来た。

「茲に見えまするが、即ち二百三高地、遙か向ふに見えまするが、即ち旅順港、市街は新舊の二つに別れてまして、新市街には露國の官衛兵營等の大建築物があります。——此の先きに見えます村落は、水師營と申しまして、乃木大將が敵

の敗將ステッセルに御會見なすつた處であります」なごと不十分な説明をしてゐる